



平家物語 長門本 十六

U 5  
2001  
16





平家物語卷第十六

摺墨池傳記の事

高綱宇治川渡の事

義經自衛東始の院参事

義仲寂期合戦事同歌渡事

一ツ子西國下向の事

能登守教師の合戦事

熊谷平山城戸口守事

一八合合戦事

薩广守忠度被討事



本三位中將被生捕支  
新中納言知盛被給支  
經盛子息敦盛被討事  
備中守師盛被討事  
太夫業盛被討事  
小宰相身没事  
平家頭獄門は掛支

目録終

摺墨といけり此事

元暦元年正月一日院は去り十月十日五條内裏  
大膳大夫業忠は六條西洞院に家へ為渡りたりける  
世間未落居せざる上四所は葬禮後の所處もなき  
は拜禮もかゝ院の祀りかゝけり殿下は祀りも  
ふり内裡に主上渡らばり(共備)の八箇は一天に  
新四所拍りかゝ清涼殿七御座も拍りけり十解凍  
として南殿の御格子三間半をぬたりけりお家を渡  
彼國屋島の政は春をむく(て)の始りけり元日  
三の親式は終る(て)の祀りかゝ先帝おえり(て)終る

四方指のちく少時おもふ一節會りふり行水のた  
先くも不奉鯉使の奏せず世乱にりしとも都を  
とけすふかくもかきとくゆをとも長也青陽の春  
りて海吹風も和りつと日影も長閑た成り  
共おもふ此人は真苦ふおとゆきあひ川とかく  
水とともられたるあちして春の朝月の夜待  
歌管弦少る扇合繪合板と真五し事思ひこし  
て長は思言しとのひりかき長也十日任録ふり  
仲おもふ追討の為西國へかむとして今日日門出すし  
閑く様小東國を兵部依り蒲野者源九郎忠を  
大将しとて數百騎の軍兵をけしとの勢で義仲  
をの追討由開り其故と義仲上皇を取らぬを  
て人こそ解官して平家へ思ひもおとらす  
朝威を忽緒きりし頼朝是を聞てより仲を  
差置すと佛神をのめりあきり王法を養して  
天下をも志川の君をの守護しを化とて社上せ  
しに左根に狼藉を致條甚き怪ありとてい  
つたをかしてあしりけり所の境既し先陣は美  
濃國不破の附り後陣尾張國吹海浮よりけり  
る由記出へけれは義仲是を以て空治勢を西道

を、あう人爲に親類部をふちまゝあふふ又  
福原一責七の、其に無敵佐七神小摺墨池つ尻  
とて二疋七名馬つり京つ三つ又小池つ尻の馬を、と  
蒲殿は、の、と、た、て、梶原源太景季以下の侍家り  
と、所、を、し、け、れ、と、自、然、七、事、物、人、時、頼、朝、物、七、具、志  
て、兼、う、ん、あ、か、と、あ、か、し、れ、れ、ま、し、と、力、不、及、し、て、出  
り、ゆ、れ、今、一、度、や、て、み、ん、と、重、て、中、た、り、け、れ、小、摺、墨  
を、初、め、て、ん、と、て、多、む、ひ、て、け、り、景、季、收、て、あ、か、し、れ、れ、  
後、依、本、部、高、原、上、治、の、い、と、又、中、に、あ、り、た、り、れ  
と、兵、部、佐、長、い、思、は、れ、り、余、の、馬、を、あ、か、し、れ、れ、

川、は、先、づ、け、て、高、原、せ、と、て、彼、秘、藏、の、池、つ、尻、を、た  
ひ、て、多、り、面、目、し、あ、か、し、れ、れ、高、原、中、に、あ、り、今、度、れ、今  
戦、に、高、原、死、に、多、り、と、聞、く、ま、れ、れ、小、摺、墨、池、の、先、陳  
に、あ、り、と、人、に、あ、か、し、れ、れ、に、け、り、と、は、な、か、く、一、巻、し、り、  
いと、聞、く、か、一、巻、に、し、り、と、多、り、と、出、あ、あ、の、い、巻、し、り、  
と、て、出、に、多、り、各、總、倉、を、あ、か、し、れ、れ、浮、島、の、原、に、人、  
あ、り、あ、て、馬、あ、ひ、り、の、所、を、馬、共、み、る、景、季、の、摺、墨、池、  
増、ら、馬、を、あ、か、し、れ、れ、り、ゆ、れ、猶、も、み、ん、と、て、高、原、に、あ  
上、て、是、を、み、る、引、馬、共、何、疋、と、言、事、を、あ、か、し、れ、れ、思、ひ、  
た、く、小、色、と、は、鹿、の、ひ、ら、け、て、或、は、諸、口、に、引、り、有、或、は

片々ちとひつり引たひつり引とをしりしける  
内に池つたとおかしたるにんふくまんの轡を  
おれておふ所の歎うけて志らぬとて舎人の人  
して引て出来たり梶原およりてみれば誠の池つた  
池あり事うさうたりを予のたつた馬と  
間佐々木殿七御馬にの依と本殿と三御殿と御  
殿と御殿にの依と其とれ景季思はるの侍と  
景季のたれに中たれにたれとて佐々木にたれ  
けりたれ恨たれ日本國乃大將軍の時よりて  
偏頗志願るおを是程思はれよりて奉公志て  
何れの小僧人の家の侍と終りて死ありあり  
今ハ是かたれたれ依と本にたれをたれ  
く返答せと真中して村ありて景季自害とて  
大事を前とたれとておよりる景季の侍と  
志かたて損とつたんと思ひて依と本を侍と  
何れか出来景季思はるたれとたれとてや  
白くぬたてたておとんとたれとて成とてや  
池のたれをたれとたれたりおと云とて高田  
原よりたれをみよたれにたれはてけれ  
はてのたれはたれとたれとたれはたれとたれ

おふびんれよつ北の盗みて夜の内小瀬白ナキモ  
しそかくらしては言たを世のしそ人ちく此  
國王千頭の家の泉を助給ひたりるは他國責た  
てし同世免戦ん。為ふつを者を集て九百九十九  
象をたひていくふ母のをせたりいすも政の象を  
いし此事のし國王のまんを州居れたりるを  
つるは者察ナトりの彼象を盗みたりて一番を  
掛てふ此の大將をもち取て勲功を記る由中傳へ  
たり高綱私の用ふゆして各所住及び此為也和夷  
の所をせしるしと出持開つれしやれは梶原子

うふつれて腹よりけりしを如しはさらハ景重の  
盗ましとち中ける此馬を池にたといひける事ハ  
馬をも人をもち及馬也ハ寸の馬を此こし  
摺黒土と其馬の少とくたすしは社をける

### 高綱宇治川渡り事

十日伊福より仲の為征夷大將軍由は宣り  
から親王あやより仲を為追討廿の辰刻小事國  
より軍兵二日に宇治河内両方へ都入ら勢界の大  
將軍にと浦冠者武田太郎加免太郎同坂前  
一条次郎板垣三郎侍大將にと土肥次郎輪石郎

少智部小山守教官山田里見之者共を初め  
三月廿五日迄也守治の大將と云九部義  
經侍大將と云留山莊司次守梶原平三郎子源太  
佐木四郎治善莊司糟屋友平山武者所を始  
して計方三千余騎伊賀國を廻り守治橋小をり  
二ヶ所六千余騎に過りり木守り仲お前  
勢出たふりけり梶原義光を十部義人治家  
の河内左河と云所小何りり此はけ礼を責ん  
と云し十部義人等たにけり今井四郎義孝を流  
罪をい先に出たも云守部先生等弘仁科  
梨三郎余騎にて守治一里と云京に比力者三郎人を副  
て若者車ゆり院をりて守り西國一柳幸か  
しきんと支度して上野國那和太郎弘隆を  
お具して義仲の誓僅小言騎に過りり今  
井四郎義孝等三部義弘守治唯田西方共橋  
を引て河よ乱板をお守り縁をま(さうの)あを  
たか(り)のけたりけ礼とたやしくの度板あつてけり  
九部義經守治川れもあよあ守りてそれい比も正  
月廿日守の事みれとひらけ高根志賀山村流  
しれ雪に(て)雪解し水はあふりけり兩岸けり



して志波をいたしせられたる志波りよたたりて  
市子より水もあつたんい河をいよ兵考きつる  
身をあつていよあのおちのいよのいよあんと云評よ  
畠山莊司の命生を廿一長崎の直島に赤鯉澄志けり  
子の取あをいよて大中黒矢あをいよ抽能りの  
太刀をけりあれた馬いよけり此鞍をおいてあを  
たりける河端よあをいよ向へ此岩をいよ渡してあを  
あをいよあをいよより定て河治川橋多両所の橋の  
ひりんつるんとあをいよあをいよ志波いよあをいよ  
いよ河川の像よあをいよいよあをいよいよてかくとや

あをいよ河をいよ水海いよあをいよす川より更いよ  
あをいよたれつ橋をいよ渡してあをいよあをいよの河の神を  
あをいよ馬いよ足たれあをいよあをいよいよいよ高倉を  
いよ時足利又太郎も渡せとあをいよいよいよいよいよ  
あをいよいよいよ武蔵いよあをいよいよいよ丹堂を初  
いよいよあをいよあをいよあをいよあをいよあをいよ  
院のいよいよの角橋の小島いよいよいよ佐木四郎高綱  
と梶原源光景季といよいよいよいよいよいよいよ  
あをいよいよいよいよいよ急れたりあをいよいよいよいよ  
あをいよいよいよいよいよあをいよいよいよいよいよ



もやく渡りおをけけ北流<sup>共</sup>留山をめぐりたゆまず後して  
行く武藏國の任人大櫛次郎河の表をみまきして  
ついで北流の早見おとこくおたて既よ河をさ  
けをを下るをねとみ北にちたけし甲のもちお  
みへたりけ北大櫛留山とみつけ北に是を目にうけて  
すまるとよりて甲のもちたてたたり留山を是  
を不知りおとた何となくいさう甲のあのみとあ  
此すまじあう舟のよやると思ひてよりあうのまて  
うと新をみ北に福衣のこたへ北に洗草の澄たて  
薫つもの矢負ひたる武者也其とら留山甲にたつた  
たるといある者しやうあつた大櫛三郎安則とをい  
と中櫛ハ留山いさうよりたたりとを渡りける  
留山乱れお流りちやけり向の岸に三より  
たけ斗よより過し河原原く志てけう為しと叶  
くさし是よりさうにかけおとんいさうは流るよ  
かろりお斗ひにては危しとやれ留山大櫛をろ  
るのうらあよれ勝ておけ哉たり大櫛足をうけおんて  
ろ杖を突てお立たりけり大櫛甲の緒をしめて  
ろ取連しとてかりおはけしんる先陳ハ留山すま  
とみけれお母さうの岸をめぐり武藏國任人大櫛

三郡守河渡りたりと中花ののりもみまわつと  
英ひなる富山渡りたりとれに斗方五千奈路の勢が甚  
我の〜と渡りたり水にせりて下り河さ〜難  
人共馬の下手につれて渡りけり。勝がかみかき  
は〜ありふたに沼谷右馬亮重介依本郡兼侍  
と馬が下りて揚子河にけり。その山武者所末重  
糟火口敵を有季よりつれたる三言奈路矢前を掛  
つろのちふをあり〜して射けり共大地賣うら〜れと  
空治の河のこゝに破れて敵のち〜を落りたる勢も  
と輪乞三郡ごんか橋かを三郡の斗ひにてたれ〜の工員治の  
源と云所をや〜して追おとん今井四郎三郎先生  
の勢に戦ひけん共本より母勢あり〜れと河に  
よかけ子ありて回く京〜取り入ぬ空治勢も治し  
たら日記徳人倉一あり〜れと兵部佐をとり河に  
高綱五左と同路よと〜れ此者と早先陣と  
〜りとあり〜て日記をみるよ今度空治河川の  
先陣近江國の住人依本郡高保と共有名  
義經自昇東始て院系事  
義經は馬次中に京へせか入本々空治勢多雨方を  
わと〜れか〜して槍で西路斗〜て院西所六条殿へ

は勢多より仲立勢多ありおとされては宮廷の  
んきんより衆はつと中代は法皇を始衆勢多て公  
の殿上人北面の筆に至ら道又いふあり車をのせん  
あゝんとて各道を見いてあぢ縁縁の程ふが  
れ既し家勝光院柳系道責をく替れあへはの南  
庭と馬と衆かゝる衆りたりは共さしそ中世後の  
からて本堂を此にける院中にと上下のをなして  
ぬれぬふりある志うしにを其後の世に門は  
れにほり本堂のありを後の女席とりておきたりは  
りおれをおしみてつとりの内ふり越後中太  
家光と言者かいた既しあつたたりいふかしてと  
えしをんをといふ苦本をうとをよせさりけはと  
家光終し此の庵をすしそ縁かき切てふ  
にほり本堂を是を二つと仲にすめなる自害に  
とてふる本堂の境りあつて河系へ出の義経の部  
六条河系を引向ひて合致すより仲立の發  
ひとありい切て教は運の極に成てはれ、  
あんしよかけあふらして思ひしはたけり  
部ふりつて是を追ふ大膳大夫業定ハ御所の  
東のつらつたうへそ四方をみよ六条東洞院より

武者六所の西をさしそは伊弉册のとカケルハ法皇  
大抵小野馬の勢おんこまあう仲攻の勢おんや  
此度おれを君の臣のらせんてよおんこまあうとあはれとて  
人いふひひふんはるゝ業忠よりくふてりし件  
の年堂はてとひはりけり竺効をそそひの唯今  
京へ入の東國の兵とあはれんと申時九郎冠  
者門をく池かて馬より飛かりて業忠お世のひ源  
倉兵衛依原頼朝の舎弟源九郎義經と申者に  
ていふ人衆は入さ勢にすくはけり此の業忠余りの  
備前小野をたはひのたのちが飛かりちとて腰をの  
れおんてけりいふ言ひかたりけりおれは  
くはふまをたててまわくは所々番りてせうけ  
れと上下おわまふよ終末の言ひをひらけり  
義經志地の源の直宗小野朝黄の唐後の裾紅澄  
水澄小湫形うちの甲をふとんて為持たり令  
化りの太刀をんれたりる弓取の器小紙を二寸半り  
たりて南無宗示郎八条田大菩薩と書てたをぶ  
巻たりる九郎美經お遊具して六人き有る砂五  
人内老人ハ武藏國の住人秩父比末子皇山莊元ハ部重  
忠が後の冒おしれれむけの袖と緋地の綿を

と給た系紫綴の上返しに大中黒此征矢の篔  
心やたをくたををいたりけり一人の國任人河越  
太郎重頼志けの直垂にいわけの袖にと赤地乃席  
をいわけに黒系綴の書に大なりこの征矢の  
いを屋に何すのあををいわけをいたりけり一人  
お模國の任人浩長三郎庄目重國指衣直垂に大  
のら先給洗革の書にたし十りをの征矢おいたり  
一人の同國任人梶原源を景季てこのいわけの直垂  
に着お給た書にて法をいわけの征矢おいたり一  
人の近江國任人佐々木四郎高綱萌黄此すこの此

田直垂に小半黒の征矢をせおいたりけり重志の  
始ては方に各乗る六人の兵も甲をみればたせ  
たり直垂の上返しも思ふいわけにうもりたり  
たれそこのみかぬりお先をせおたりけり  
とて中川の外車窓のあはれをいわけたりけり  
たすいわけをいわけとあををいわけたりけり  
法皇中川に給たる獻覽のりていわけにけり  
屋のいわけをいわけとあををいわけたりけり  
細兼り子守たれに義經中けりけり義仲むあんの  
由頼朝兼りけり今吉中蒲野者七りけり義經

を始として其の部亦三十人衆を其の階六万  
年治に及んてその治勢多而万が入るに  
了然ハ勢多の兵入る勢多を治して先に  
系りてい玉伸と河を治せ此なり小おちたるを  
亦其数多追掛ふつれを今一定の事ぬんと  
事りふけよ北中たる院治に其伸と事當り  
り攻り系りて狼藉り付る義經此御所にて能  
く守護仕れと信ずけ礼ハ何事事なるべし  
て門小くして其の巻也

義仲取期合戦同頭渡事

其後義經の勢三十治斗六条河原に於たり三十治  
の内には大将一人有り一人は塩屋の部通成一人は  
物使河原後三郎有直也塩屋の部破れハ其當り  
兵を唯うけし事と我中ける去程不追つれハ三万条  
河池来りける本多ハ上野国保人那和太郎弘隆  
のいふ事其勢百餘と三條河原と六条河原と  
此間にて返し合戦ハ其六度追りけりハ  
終り二條河原をのけ破りて北國の古く其  
去りて春ハ國は大将軍と上ハ其  
余治に有る今軍田に於出に其



七路也。中有一旅。此旅思。い。中。は。を。系。一  
けれ。七路。中。一。路。は。女。鞠。繪。と。云。美。女。也。紫。格。子  
の。り。中。に。ひ。た。は。れ。よ。前。黄。此。版。卷。に。重。友。の。ろ。う  
十。年。の。廿。五。した。る。矢。あ。わ。て。白。河。し。け。る。り。る  
比。外。く。た。年。し。た。る。こ。と。も。十。年。た。り。興。鞠。置。て  
紫。系。たり。けり。中。に。は。れ。と。去。る。十。武。者。二。路。の。追  
掛。たり。巴。あ。く。し。と。思。ひ。けん。馬。を。ひ。つ。す。す。う  
呼。ぶ。左。右。が。つ。と。より。る。を。時。左。右。の。子。を。さ。ぎ。ん。し。て  
二。人。の。雷。の。つ。い。ま。を。取。て。左。右。の。腹。を。う。い。を。出。し  
一。志。の。て。掛。たり。に。れ。ハ。二。人。あ。く。首。を。ひ。く。けて。死。に

り。女。る。れ。若。龍。竟。れ。か。の。若。強。弓。の。魂。兵。共。矢。の。ん  
早。の。荒。馬。系。の。何。所。お。し。し。木。を。後。軍。場。に。云。を  
も。ら。た。十。七。たり。り。り。よ。も。い。三。十。二。に。替。り。り。る。り。る  
巴。を。つ。と。掛。つ。つ。い。り。此。巴。は。い。つ。あ。り。ひ。り。ん  
あ。く。取。が。う。せ。に。り。後。に。れ。あ。へ。ら。ら。と。越。後。国。友  
相。と。云。處。に。落。と。す。り。て。河。後。に。あ。て。ら。ら。と  
う。や。木。を。を。取。し。山。の。あ。い。ま。河。系。に。お。出。て。所。北  
今。井。の。帝。城。多。を。落。て。五。次。掛。り。し。も。旗。を。巻。て  
京。の。身。入。本。を。今。井。と。み。て。け。れ。ハ。い。を。い。何。あ。す。と  
ら。つ。を。み。を。あ。く。く。て。ら。ら。と。三。は。れ。と。夢。の。あ。は。り。ん

地をりきありきり良久しくありて木曾部にて討死  
す庵うらりれきいぬ一度あんしふみほてりし人  
としてたしか也といふと御守備多し討死す庵くらひ  
六山以氣見本をいし今一度ふ系ら焼かんとて系り  
ていとい中島木曾ハ蘇すといふ所されてありの  
ありしと急事ハ蘇をい焼かしては焼けはは焼多  
為さる共なく京が追急者共なく五百奈崎付け  
ささふ木曾土佐をいふと京の勢をい一軍せさら  
んとて甲斐の一条右衛門志頼六千奈崎をい取た  
に木曾赤地の旗のひたされたるすといふと云白旗を

とていれぬいにはあるはりの甲斐でササキにたれり  
その先ふ合化の太刀をいぬり木曾の友の弓矢並  
いもあち馬は合後編のうらあれてあつやあめ  
死むて掛てきけりたりけりあちやあちひて清和天  
皇の十代の御末ハ愷太郎四代乃孫常力先て義賢ハ  
次男本守尉者今ハ左馬の御急伴孫守朝日將軍源  
義仲甲斐一条右衛門とていハ誠より仲孫をい此  
うちあちて頼朝よをて上後あちよと二川をい  
てお免いてうけ入て十文字に此戦より忠頼是をい  
て名乗ったたうてや若菜とて六千奈崎あち中島

て火出の儀たりて其勢三言余路中り小折を  
化て佐原十郎並連三言余路にて扱たる中へけ  
入て志はし戦てうけ屋ありて出たれは百路斗ふ  
折ある土肥の節、五言余路中へ入て志はし  
戦て扱けやうりて出たれは百路に折ある其後  
かよしたに百路ありては扱路所ふ折ありて戦て  
に粟はの道よまは主従五言を為たれは五言塚あり  
同帰れは塚太郎今井に節並平多湖に節家色と  
云りのつきたり折ひつまつて生捕せよと折られたる  
を家色ある軍をせえりたすけたるやうらんと

わけり何を何系あり事の折の屋にせとて今うたの  
と戦ひけれは折生捕れにあり本を今井の  
ひていひりりといはれは折あり折ありのありく  
あつた折といひたれは今井中り折あり折あり  
すよん屋ありのありつう折あり、中たはしめぬ  
水はせかうのありくあり、先まはら折は折の折  
てアから折あり折ありと思て臆病をせぬ  
ア人、折一人をよの折の折と思はれは折あり  
に二の折あり折あり折あり志川ふ念佛  
中折あり折あり折あり折あり折あり折あり

今此兵仕のつとめてて、粟津の本、本一、  
此の籠、小幡多、此方、武者、世、  
もや、本、中、一、入、勢、多、入、  
力、及、生、を、も、り、多、人、  
此、自、害、は、と、そ、加、人、と、す、  
亦、死、す、一、り、つ、ふ、是、  
志、多、人、為、也、小、幡、  
事、の、口、懐、け、れ、と、  
今、井、わ、り、ら、と、武、  
の、籠、一、十、  
乃、時、く、志、川、  
而、中、部、亦、共、  
と、し、本、勢、多、  
と、や、思、を、  
と、や、本、  
後、前、  
て、大、将、軍、  
を、り、  
矢、一、  
れ、と、石、田、  
馬、の、  
後、  
石、田、

乃時く志川北のなり此世に於ては、  
而中部亦共に本常し、  
とし本勢多、  
とや思を此母、  
とや本、  
後前、  
て大將軍とせ、  
をり、  
矢一、  
れと石田、  
馬の、  
後、  
石田、

まじう孫に為らるる本堂に書此方一為り此ハ元暦  
元心正月廿の此事もれハ常はの下の産産もれ  
馬の死もうつりれり程の産田に氷の張た測ける  
池透らんとお入たりれハ馬もよもりて働たぬ  
り夜化て身りひいたさりも今井ハつてとぞんと  
ありいて後をみ返りたりもを為久よいいていたり  
けれハ本堂ハ内甲に射たり甲の志もを馬のうら  
おれてうつりふしにふしたり為久ハ師ハ人馬も  
飛かりてたふたれをりし原田ハありて本堂もこの  
頸をとる今井ハ本堂もこれぬとみて荒もふ今令

をいけんた、ういかり今井のゆをせうして中りた  
吾たもれ、めりりみよ信濃國七任人本堂仲三権  
守兼遠四男今井四郎兼平とハ我事也本堂友  
に乳母子鎌倉とものにさる者有と志後ハゆれ  
たり兼平も着りて初れこの二所よの初ゆとの  
京とて教百治の中ハお免めてけ入<sup>たて</sup>りてさ又核  
さまにせんくけけれハ大力の剛の者もれハ本堂組  
者もかりりた、ひたつので遠矢にせいなるされ若  
禮もなれハうらうにすたやをいひつひのみをすけら  
ちとにハの矢もハ此の故に射た後ハ日本ハ一の高者

主は山供に自害するを多やハク國の殿宗として太刀を  
以て十河光をくへて馬の先に着て侍らぬ  
て社死なり太刀光二又子守りのものれ小出たり  
り是かして十部栗津七軍と云ふりり榎川  
萬光二十部藏人引家をく川庵と云ふ河内國  
中り藏人を打にうして萬光女共を生捕にうて  
京へ上りけ系流の大渡りの邊まで本を討ぬと聞け  
れハ生取もみれやうして命おしとありん  
人ハ小出がまうり一萬光と云れハ吉野の者共  
思く一萬光より幼者僅小出流の斗ありりら

鳥羽の秋山の程より九廿新斗よりて命小出  
玉上宮ハ在二部庄にうて兄弟有り三部ハ九  
郎中書子小出をけり一掃ハ木宮友小出り志るを木  
宮討れりて後植口のふつれて上と見出ハ兄三  
郎使をたて、中書部小出にけり是をたれと思ひ  
る處に本宮と云ハ討れり九郎中書子、系りありし  
十萬光ハ其旅中上りて云つ流をくハ兄三郎のよ  
く今より何あぬ事にけり共誠小收入てうけ流  
ぬのを見系くと云返事志りけり兄三郎はハ社と云  
訪れ共ハありけれ、重て使をきりたり九郎中書

わらわと誠西度のい使ふと云は素り庵くお世の共  
且と云道のい為し面目のい事也云夫と云わふい  
二心有りをい今生のをいとい吹のさい本を庵に自  
ちか急を素り二家宛命をまうんと思ふま今う  
たれあひてい程なく命をたすふんとも本主のいの  
たす九部四書司に素らん事い読くらつこの空この  
無のい素りお世の素りやまうけ北の院いと所たうけて  
神死して名を後代に何付三部及の面目をいおふ  
ちの庵とと十たりけ北の三部力不及扱ハに部する者  
お化るとはたりつうしておたすたかんす人まうし勢

いおあしくい我すたてお書司北兄弟に入庵  
弓矢と云者い志うい十花と云と思ひてお世たり何  
んはおとく庄の部うちのの難い勢てすのいおあま  
て出たよりお化をみてお書司何と云四部い出来やと  
思ひてとがくのい神と云あしあうて結て庵たり  
志ういおあしくいおらり兄弟何い一程の力をいおわり  
いおあしくいおらりいけちを三部いお勢也い北の部お  
いおあしくいおらりいお書をいおあまてけお書司に素らんを  
たり花い庄の部神妙いはたりい部命をたすくや  
と云あひたれい部おけちのい命をたすけられたらん

にと白今ては軍のついにとちり先うけて君に  
命を委ねしむとせやけりみなる人志れをい  
ゆるさる程に植の七部は愈々化り乃をのけりしに四塚  
へ登りて所をせり思ふ京へ入とれ出へけはに義絶  
此部を家ありと七条朱雀四塚へむひて合戦す  
植の七部の信濃國武者千所太郎克弘あて出て十  
けりしに川北の甲斐一系院の手にてりしら勢絶し  
今くちの信濃國武者千所太郎大夫克弘の嫡  
子千所太郎克弘とて若とせざるを統る國任人  
系太郎を傳すしむてりしにやとの必一系院の  
此由もたうなりて軍を巧る誰をも何れもいたし  
らひせと云はれは十部も巧化して十三系とい  
ていざり花は言傳う物云をむくせ確と射をとり  
て仕方の板お射射り克弘といひるを志はれり  
をうくあしを伝教をたうとてか何れも克弘  
の才の神七部の一系院のいふにむるる彼がま  
つる射死しし信濃に何れも妻子共克弘官位  
時と加らむげんと思はんまの使あれは七部  
を誰人たまんとあひしておれ一系院のいふま  
やつれをいふくまんし射て敵射多射おとし



て自言して、高麗にたり、千の七命もかけ出て  
歎け給ひ、死して、死にたり、去程に、兎玉堂  
うち、舞さして、出来、梅の、兎玉堂、舞に、て  
有、化と、人の、一家、七廣、中、入らんと、云ハ、から、時此  
為、也、軍と、免よ、ウの、をと、はず、んと、いひ、て、梅の  
を、中に、免よ、のて、勿心、上の、河を、吹み、くして、九節、也、昔、司  
に、中々、九、院と、中、庭として、梅の、を、以て、衆て、奏、用、之  
廿日、此、間、脛、新、橋、政、師、家、を、留、め、と、り、よ、の、橋、政、基  
通、と、女、攻、め、る、り、僅、に、六、十、日、程、に、か、ら、な、り、て、女  
夢、也、常、田、園、向、の、意、通、と、ハ、内、大、臣、通、隆、は、子、正

曆元正四月廿七日、あらせり、此、日、招、賀、の、儀、六、七、日、訖  
持、を、は、勢、し、か、く、ら、た、め、し、も、何、る、勢、し、是、六、日  
此、間、に、除、目、の、二、度、行、り、し、思、出、せ、り  
す、し、ぬ、も、何、る、勢、し、一、日、と、も、橋、原、を、點、し、万、機、の  
政、を、執、行、し、し、出、給、を、所、し、け、礼、い、も、ん、や、六、十、日、の  
間、を、也  
其、六、日、任、豫、中、委、仲、々、首、渡、さ、る、法、皇、御、車、を、六、条  
東、洞、院、に、立、て、御、説、せ、ら、り、九、節、義、經、六、条、河、原  
にて、檢、非、違、使、れ、り、渡、す、檢、非、違、使、是、を、後、に、て  
東、洞、院、北、大、坂、を、と、り、し、左、の、嶽、川、の、前、の、橋

此本に之く頭四有伴縁子美仲節亦之流高梨六  
部忠直根井小孫之幸親今井以節兼平也桓比の次  
部降人よ成大海を渡して禁樹せらるる此れは  
此世多者たりかく死罪に下すは所<sup>も</sup>可<sup>も</sup>ざるを法傳  
せしむて令<sup>も</sup>裁<sup>も</sup>しけるは所<sup>も</sup>可<sup>も</sup>入<sup>も</sup>ての是女席道  
をとりまて衣裳衣をはくとて惣<sup>も</sup>せん<sup>も</sup>器<sup>も</sup>所<sup>も</sup>小<sup>も</sup>六<sup>も</sup>六<sup>も</sup>  
日迄<sup>も</sup>女<sup>も</sup>置<sup>も</sup>き<sup>も</sup>り<sup>も</sup>る<sup>も</sup>少<sup>も</sup>二<sup>も</sup>女<sup>も</sup>席<sup>も</sup>道<sup>も</sup>以<sup>も</sup>下<sup>も</sup>加<sup>も</sup>と<sup>も</sup>の女<sup>も</sup>席<sup>も</sup>  
寺をよこし<sup>も</sup>流<sup>も</sup>ひて惣<sup>も</sup>せん<sup>も</sup>を<sup>も</sup>た<sup>も</sup>し<sup>も</sup>持<sup>も</sup>張<sup>も</sup>は<sup>も</sup>す<sup>も</sup>し<sup>も</sup>て  
かた先<sup>も</sup>く化<sup>も</sup>と淀川桂川に舟を<sup>も</sup>かけ<sup>も</sup>く<sup>も</sup>ん<sup>も</sup>山<sup>も</sup>  
入<sup>も</sup>の所<sup>も</sup>を<sup>も</sup>出<sup>も</sup>る<sup>も</sup>人<sup>も</sup>と<sup>も</sup>い<sup>も</sup>く<sup>も</sup>に<sup>も</sup>は<sup>も</sup>は<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>花<sup>も</sup>か<sup>も</sup>不<sup>も</sup>及<sup>も</sup>と<sup>も</sup>て

桓<sup>も</sup>比<sup>も</sup>前<sup>も</sup>に惣<sup>も</sup>せん<sup>も</sup>か<sup>も</sup>う<sup>も</sup>つ<sup>も</sup>を<sup>も</sup>を<sup>も</sup>り<sup>も</sup>日<sup>も</sup>か<sup>も</sup>の惣<sup>も</sup>せん<sup>も</sup>以<sup>も</sup>り<sup>も</sup>  
大海を流<sup>も</sup>して禁<sup>も</sup>樹<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>化<sup>も</sup>け<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>至<sup>も</sup>仲<sup>も</sup>比<sup>も</sup>天王<sup>も</sup>の  
世<sup>も</sup>の一<sup>も</sup>也<sup>も</sup>死<sup>も</sup>罪<sup>も</sup>を<sup>も</sup>し<sup>も</sup>り<sup>も</sup>化<sup>も</sup>荒<sup>も</sup>を<sup>も</sup>考<sup>も</sup>り<sup>も</sup>女<sup>も</sup>慈<sup>も</sup>阿<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>し<sup>も</sup>  
と<sup>も</sup>下<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>れ<sup>も</sup>に<sup>も</sup>り<sup>も</sup>傳<sup>も</sup>少<sup>も</sup>虎<sup>も</sup>狼<sup>も</sup>因<sup>も</sup>衰<sup>も</sup>て<sup>も</sup>結<sup>も</sup>持<sup>も</sup>如<sup>も</sup>蜂<sup>も</sup>  
を<sup>も</sup>み<sup>も</sup>り<sup>も</sup>し<sup>も</sup>に<sup>も</sup>沛<sup>も</sup>公<sup>も</sup>咸<sup>も</sup>陽<sup>も</sup>宮<sup>も</sup>に<sup>も</sup>入<sup>も</sup>し<sup>も</sup>て<sup>も</sup>若<sup>も</sup>頌<sup>も</sup>羽<sup>も</sup>後<sup>も</sup>り<sup>も</sup>  
来<sup>も</sup>らん<sup>も</sup>事<sup>も</sup>を<sup>も</sup>忍<sup>も</sup>て<sup>も</sup>令<sup>も</sup>浪<sup>も</sup>朱<sup>も</sup>玉<sup>も</sup>を<sup>も</sup>掠<sup>も</sup>す<sup>も</sup>細<sup>も</sup>馬<sup>も</sup>美<sup>も</sup>人<sup>も</sup>を<sup>も</sup>  
又<sup>も</sup>犯<sup>も</sup>す<sup>も</sup>す<sup>も</sup>い<sup>も</sup>た<sup>も</sup>り<sup>も</sup>る<sup>も</sup>に<sup>も</sup>函<sup>も</sup>谷<sup>も</sup>園<sup>も</sup>を<sup>も</sup>守<sup>も</sup>て<sup>も</sup>漸<sup>も</sup>く<sup>も</sup>二<sup>も</sup>教<sup>も</sup>を<sup>も</sup>亡<sup>も</sup>て<sup>も</sup>  
終<sup>も</sup>ふ<sup>も</sup>天<sup>も</sup>下<sup>も</sup>を<sup>も</sup>治<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>事<sup>も</sup>を<sup>も</sup>治<sup>も</sup>り<sup>も</sup>義<sup>も</sup>仲<sup>も</sup>比<sup>も</sup>初<sup>も</sup>に<sup>も</sup>步<sup>も</sup>入<sup>も</sup>と  
云<sup>も</sup>より<sup>も</sup>其<sup>も</sup>慎<sup>も</sup>と<sup>も</sup>て<sup>も</sup>頼<sup>も</sup>朝<sup>も</sup>の<sup>も</sup>中<sup>も</sup>知<sup>も</sup>を<sup>も</sup>侍<sup>も</sup>り<sup>も</sup>沛<sup>も</sup>公<sup>も</sup>謀<sup>も</sup>  
け<sup>も</sup>り<sup>も</sup>と<sup>も</sup>お<sup>も</sup>と<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>は<sup>も</sup>り<sup>も</sup>ち<sup>も</sup>細<sup>も</sup>馬<sup>も</sup>を<sup>も</sup>と<sup>も</sup>衣<sup>も</sup>也<sup>も</sup>義<sup>も</sup>仲<sup>も</sup>比<sup>も</sup>心<sup>も</sup>事<sup>も</sup>

お乃み天命に従い河剌叛逆に及此物殃身も後て  
首を京に傳ふ本業の拙き事をしそか<sup>れ</sup>て  
無斬せいつかり者<sup>の</sup>志<sup>の</sup>りらん札<sup>の</sup>書<sup>て</sup>たてたり  
宇治川を水つけしそか<sup>れ</sup>渡<sup>の</sup>木<sup>を</sup>九<sup>部</sup>剌<sup>叛</sup>  
田<sup>邊</sup>の<sup>ば</sup>く<sup>り</sup>の<sup>み</sup>か<sup>の</sup>そ<sup>の</sup>も<sup>の</sup>本<sup>業</sup>の<sup>拙</sup>き<sup>事</sup>を<sup>し</sup>そ<sup>か</sup>れ<sup>た</sup>志<sup>を</sup>り  
名<sup>に</sup>言<sup>は</sup>ん<sup>本</sup>業<sup>の</sup>拙<sup>き</sup>事<sup>を</sup>し<sup>そ</sup>か<sup>れ</sup>た<sup>に</sup>犬<sup>に</sup>死<sup>ん</sup>だ  
木<sup>當</sup>の<sup>世</sup>も<sup>と</sup>と<sup>れ</sup>と<sup>山</sup>料<sup>と</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>て</sup>草<sup>木</sup>の<sup>か</sup>い<sup>は</sup>て<sup>社</sup>  
何<sup>ぞ</sup>ふ<sup>つ</sup>つ<sup>と</sup>天下<sup>の</sup>の<sup>口</sup>括<sup>ふ</sup>及<sup>り</sup>も<sup>う</sup>か<sup>れ</sup>世<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ひ  
とい<sup>ひ</sup>あ<sup>ら</sup>ひ<sup>と</sup>い<sup>ひ</sup>ん<sup>人</sup>の<sup>か</sup>り<sup>日</sup>比<sup>れ</sup>振<sup>回</sup>り<sup>不</sup>  
當<sup>也</sup>自<sup>業</sup>自<sup>得</sup>因<sup>果</sup>の<sup>と</sup>り<sup>か</sup>れ<sup>免</sup>角<sup>云</sup>不<sup>及</sup>

義經西國下向事

九部<sup>の</sup>書<sup>司</sup>と上<sup>洛</sup>果<sup>と</sup>急<sup>す</sup>鞍<sup>馬</sup>の<sup>番</sup>師<sup>東</sup>  
光<sup>坊</sup>の<sup>見</sup>参<sup>り</sup>て<sup>祈</sup>轉<sup>を</sup>す<sup>と</sup>す<sup>ん</sup>と<sup>あり</sup>も<sup>れ</sup>ん<sup>多</sup>ふ  
おの<sup>乱</sup>化<sup>を</sup>濟<sup>す</sup>障<sup>り</sup>か<sup>く</sup>志<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>か<sup>く</sup>扱<sup>過</sup>さ<sup>れ</sup>り  
本<sup>業</sup>の<sup>拙</sup>き<sup>事</sup>を<sup>し</sup>そ<sup>か</sup>れ<sup>た</sup>志<sup>を</sup>り<sup>日</sup>比<sup>れ</sup>振<sup>回</sup>り<sup>不</sup>  
當<sup>也</sup>自<sup>業</sup>自<sup>得</sup>因<sup>果</sup>の<sup>と</sup>り<sup>か</sup>れ<sup>免</sup>角<sup>云</sup>不<sup>及</sup>  
谷<sup>右</sup>馬<sup>亮</sup>重<sup>師</sup>佐<sup>藤</sup>三<sup>部</sup>同<sup>四</sup>部<sup>日</sup>下<sup>部</sup>号<sup>拾</sup>四<sup>部</sup>一<sup>七</sup>  
鞍<sup>馬</sup>一<sup>番</sup>り<sup>て</sup>東<sup>光</sup>坊<sup>の</sup>見<sup>参</sup>り<sup>て</sup>祈<sup>轉</sup>を<sup>す</sup>と<sup>す</sup>ん<sup>と</sup>あり<sup>も</sup>れ<sup>ん</sup>  
今<sup>の</sup>物<sup>成</sup>る<sup>に</sup>喜<sup>ぶ</sup>涙<sup>を</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>夜<sup>も</sup>入<sup>て</sup>ぬ  
志<sup>を</sup>り<sup>日</sup>比<sup>れ</sup>振<sup>回</sup>り<sup>不</sup>  
當<sup>也</sup>自<sup>業</sup>自<sup>得</sup>因<sup>果</sup>の<sup>と</sup>り<sup>か</sup>れ<sup>免</sup>角<sup>云</sup>不<sup>及</sup>  
遂<sup>に</sup>た<sup>り</sup>し<sup>と</sup>中<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>せ<sup>て</sup>表<sup>出</sup>す<sup>と</sup>し<sup>強</sup>み<sup>た</sup>り<sup>し</sup>中<sup>に</sup>室

殿の内より出来り此老僧出でてらん此老僧を  
とておれり此老僧として志務を至老を祈りて  
て之らと夢小志の事とて至老たる也いよ  
多れり〜と思ひてかんきをかく〜師の由坊に  
てうゝらん〜と申はたり東光坊花を伴て誠小  
沙門をならせり〜老僧は〜を中  
れけり此老僧志は〜とて心志川より十  
々々其老僧り受事あり〜又此老僧の  
せらるる此老僧りて社政む〜と  
はたり此老僧古し〜とて年本りる  
ひたり有縁りこれに〜とて志を  
けり此老僧り神主〜とて思ひん  
ていよ〜と夢思想のつけり〜と  
て後て〜とこれり此老僧り  
大風に船り〜とて此老僧り  
わらわら〜とつけりこれり

其のい〜とて志家征伐の爲り九神義経西園  
向義経を院の四所六条友〜とて  
神代が傳りり三の御室のり神璽室  
是やお揃り事故なく都へ返り〜と  
入り此老僧り

りし 陸奥兼らぬして 孤出ぬ 吾家ハ 播磨國あり  
山崎中國水島兩度合戦に 打勝て 山陽に七ヶ國  
南海道六ヶ國 都合十三ヶ國 うちるひ 一して 其勢  
十百金 跡に及り 木をささぐ けぬし 開けし ぬれ國  
八島を 出れぬて 折は 國と 播磨との 境あり 難波  
一谷と ちり所 小築り なる 春正月 是と 究竟 何れ  
とて 城郭を 搦て 先陣と 生田 赤漆川 福原  
と 初陣を とる 浮陣ハ 宝高砂 明石の あり  
と 流る 丸海上に とも 數千艘 此船を ささぐ ちり  
島ハ 小所 あり たり 一谷ハ 口狭く 奥に 故し

南と 海北と 岩高く 屏風を 立てる こと 馬の  
人も 少し あり 及て 此 折る あり けり ちり した ちり  
城也 赤旗 其數を ちり ちり ちり たり けれ  
春風 にも ちり して 大小 龍化 燄の あり ちり たり  
こと 誠ハ ちり たり こと ちり あり ちり あり  
く ちり ちり あり ちり ちり 年の ちり 信長 人 任 賢 伊 勢 丸  
國の 死 あり たり 華 北 陸 南 海 あり けり ちり ちり  
つれ たる 者 甚 ち 不及 中山 陽山 陸 四國 九國 あり 宗  
と 見 ちり して 流り ちり 播 磨 此 國 にも 池田 丹 高 基  
美化 國 にも 江見 此 入 石 豊田 權頭 備前 國 にも 難波

次部經老一類同三部經房備中國了と妹尾太郎忠  
康一類石賀入及建部太郎新見比令司備後國三  
奴可入<sup>比</sup>伯耆國に比小<sup>比</sup>比基原村尾海六成盛日  
野郡司美以出雲國に比塩谷大夫多久七部朝山  
来身白横田兵衛惟以富田押使宇筑國に比  
源兵衛頼房周防國に比石田源太維乃入太郎  
有朝周防令高細石見國に比兼至大夫横川郡  
司長門國に比豊東郡司秀<sup>平</sup>豊勤大夫美親  
厚東入道鎮西比軍に比常地次部高直石田大夫  
種直杵浦太郎高俊部司權頭奥平佐伯三郎是  
康坂三郎惟良山床兵衛次秀遠阪井兵衛權を以彼  
氏部大夫成良の謀にて但比河野四部通信の與  
此外大路系り集少島豊<sup>一</sup>頂羽の鴻門に向  
々如く何々と是を責落く多人之於之に力

能登守教経所、合戦七事

去程小比以子の國に願ひ、平家小中をたうひて  
源氏に出、海を遁して船十三艘に乘て都への  
あり其勢二十余路に比過海りたり源氏より急  
小比以は、系り人等家に夫一射、けて是をあり  
て小比以を殺けんとも彼前國を、比比門膠中納言

教盛父子三人并系流にて備前國下道郡にあり  
すはとれそこのしふへおせおきんちりし地あり  
けれと越前三位通盛能登り教院の事をせしむ  
から尼烈川を義院のとき乗馬の草のいたる者  
其二心ゆらんおきてつぎいふれ其後かると人瀬河  
十すきしとわかれり揃勢りたり素に押寄りて  
戦ふかれらと人目もそそ矢一射りけんとおぼし  
川系能登り大にいりて責めれに在座おき  
くそ教の方つありいたるる志はくくいたつん  
と淡路福浦と云ふ所たりりか國に揃勢  
冠者淡路冠者として源氏二人を是に六系判官  
源あり揃り冠者揃勢も頼仲も子と淡路冠者  
同口御前頼方も子とれに淡路國の住人皆おの  
兩人につれたり横波國在座り此二人を大将と  
頼方も出れをれと通盛は了絶淡路へ渡り一日  
たしういりる揃勢揃勢冠者り淡路冠者りこれに  
り能登りも在座り二十二人の首を切て交各  
をさ活て福原も子も我も子能登り二人は伊豫  
河野御通信をせのんとて三日にわけて四國へ  
おしりたり三位とつは國北郡花園にたれ

能登子禰波國をいふは此所には往き來ひ通信此を  
を南て高麗國ぬ田太郎と源氏に合さしり  
りし地出へはれぬ田太郎と一にあらんとを奴田  
尾の伝はる今のに備前國の島に居りて  
この島にいてぬ田城小つまにりて家の中りて  
お川うけて一日一夜責らるた夫たの村つりし  
て是れぬ田太郎甲をぬたををのししを將人  
に系列り河野四郎通信の節等三執四人うりしを  
化て僅小主候七給小りて是れを能登子  
侍小主八為貞と云者引取し村にりしは此所  
をを射あしてなり六給の内三人は目のあにて死なり  
あり三人はしやし死なり河野三つりて平八為貞  
を村たり三人は河野禰波七郎為包と云者八平に  
うてありし部小あり是れは河野が小引取て小船  
小せせて任年の國のなかり能登子河野ををりち  
にうたりはれは太郎はぬ田太郎を生捕りしを  
福原の是れあかしてを有りしにり此所國住人  
の言ふ六部宗益と是れ源氏にあたりしは是れ  
一やりちを能登子にりて小船三艘小なり  
人をりて追うけけり西宮の沖を追つたなり



此六部と矢一り所十々紀伊政を以て一と爲小  
けり紀伊國任人菅部重美と云者是も原  
氏小の所一り所ら澄路此の同六部出也原氏出  
所一り所て京へ出る所紀伊國所は若河と云  
一つ紀伊と記を一り所りて所りけりを能登守紀伊政  
かかして後て此れをせし兵三隊人々一を切て福原へ  
奉る備前國今本城に河野四部通信豊後國  
任人緒方三部推能海田ノ爲宗通白木ノ部推守  
亦に一處に成てい蓋たなり一紀伊(け)れと能登守  
二千余路にて今本城へお一り家て一り一夜た

ういて城内すは小丸は徳西七者共推能を初とて  
豊後此地へ爲り流石石西河野とれ心の事なれと  
四國の方へ爲り能登守今本城を責成して福  
原見事か一とそを思つて所りり小丸  
能登守も中てれららと申して四國九國一りを  
流りてかれらを責成して衆を爲る一り川は  
京の原氏の勢むと兼りて見事か一と兼りてれと  
中出れけれと衣大将屋とせつ一り元暦元年二  
月四日吉家福原にて故大政入る忌々とそ一り  
しく佛事納れり過り月日志し福も一りを抄て

十代を如きやれとこころおとせりめうりてさうかり  
く善にもぬふり世の世にて何きくく起立塔  
供佛施僧のいとみよすのに耳目をおとれ子  
事してとおたつたれおのわとくはともみる也  
男女のらんたちさつとておしやれはるおは  
うふくたれ既お都お入り入るおるきり一は一  
けれとのふりそすきり一門客部徒落していとせ  
つたにきり三種の神祇を帯して君かて後らせむ  
つとすは是お都おれと叙位除月僧事おと  
お終て傍り傍り官おされにり大外記中原師家  
子国防女師隆と大外記より兵部少輔政時と叙位  
藏人にあは藏人少輔とて中なる若將門ひひし  
國をおひひしとて総國相馬郡お都をたて我身と  
お親王と称して百官をおしたおはり曆博士とて  
かろはれおとまおしとてるる何れも古京をお出  
せ給にれとも万葉のほおおたりとて内侍兼  
おんしや物と叙位除月おひひ書しとてお是と  
ひと中なる権元三位中将推盛と年危たり口お  
あふはいておふたとの置し一人の書おる  
くおかされて商人と多りおしおの法おる年を

此通に北寄と申入てむ。さうりあはあはら者共不  
科あひしりまろわれりつれせぬるは現ふあふ  
あふりたりしむとあふしと書つけるるをみあひ  
てとむりて一氣にそまわゆる外もあつて心ひ給  
事とひやうよりあれ共人の為いとをしとれと心  
志のいて口をおさうさうしたる三益あはれあはる  
何と枕小置みて咽する書るに、あの子をばあ  
れりいあし志川みてあしとれ人よりあや  
そふるいて三位中ねら池大納言此殿うに於  
に於てあをりて二心ありとて大臣りうちとけ  
絵を子とけりしとてあ物をとていとあはれなる  
其あはれり文歎増長一切あ悩の文をてあに穢  
書をいしとみかし蘭字志執の比つあふとれ  
淨土を福子におうし高執開發乃みあはる給と今  
生に妻子をあのてあはれりあつてあふとれ  
恐れをなれ沈て来しにも修死道におあはる人あ  
たういかしとて只一門に志しれしとて故志あひ  
よて今一度妻をりて志念ををういて宗に歸終  
せんが事五應とんとあはれいあはれいけれと  
何事その入りあはれあはれいあはれいあはれい  
二

位儒於全親と梶井宮（一）氏の目高也凡々たよ  
り此外（二）にみまき宮に旅の室の有様ありいなるは  
心算（三）しるれ教（四）り末志（五）河（六）るらんおとさ（七）く阿（八）也（九）  
す

### 惣谷平山城戸口守事

四源氏二手に分て福原一と長人と志はるる今のの  
佛書をもとめたけん事つみあがる屋（一）おらに  
あつて六（二）りら忍（三）のとして七（四）のの刻に東西の城  
戸口の矢のてせとけたむ追ふは大将軍と蒲野者

頼朝四の京を三て付の國をりやう（一）か一谷（二）の世（三）り  
おきり（四）一筆と武田太郎信義同兵衛有義加賀太郎  
遠光同の節長清一茶次節忠頼梶垣三節忠信侍  
大将に梶原平三景時嫡子源大景季同平景高富  
山庄目六節重忠頼毛三節忠成半登四節重朝小山  
田節重重千乗以絶種日太郎純時日小太郎成純  
相馬小六節行純日太郎純信日六節胤頼武者三節胤盛  
大次郎四節胤信山田太郎重助山谷節重幸治谷三節  
庄司義國同右馬亮重賢禰波四節大夫廣綱村上六  
節判官代忠國小野寺前司太郎通綱庄三節家長同

三郎忠家同九郎廣方淡谷五郎通綱中村三郎時経  
勅使河原權三郎有直河原三郎高直因次郎盛直徒  
父武者四郎行徳公家次郎重光小代郎行平淡光  
右太郎同三郎同四郎同五郎中茶車次家長安保次  
郎程光早河次郎信徳當我太郎資直中村太郎を  
和々々々上右左路にて六日南之刻に阿波國生田の交  
に夏に乃の 禰子の 大將軍九郎より 經河内京を出  
て三草山を越て丹波政の向相院より筆にて安田三  
郎義吉田代尉者信徳大内太郎惟成丹院次官親  
能依系十郎義速侍大將に土肥次郎實平婦子  
淡太郎を平山右高能教天野次郎直院糟谷藤太  
右季河越太郎重頼同十郎重席平山武者家季  
重平迴太郎為重然右次郎直實子息十次郎重  
家依、本十郎高徳小河次郎佑義諸同兵衛重院  
三郎遠奈合子十郎家忠同与一家貞猪股小平太  
教得渡折小太郎清忠同四郎忠信 伴勢三郎義  
盛源八廣徳長野太郎能包奥力以佐友三郎 能信同  
四郎忠信多良五郎美治同太郎光義片号太郎  
経治同井次郎能以筆右太郎清高首也治太郎  
忠俊同太郎國長同部太郎忠澄同三郎忠孝江田

源三熊井太郎武藏坊辨慶を始として一万余  
流に丹波路よりかゝる三草山北山口に其日の成の  
刻中につれり九部義経と赤地の流の直岳  
に黄返の思召てあひ移る馬はつとくたす  
ゆふのくも尾のふりらひらるる後をのち雲と云に  
帝のりける東國一乃名馬也二日後を一向にて  
たりけり三草山と山内三里也亦家をあらを起して  
三草山の西の山をいむ尾とて大將軍の  
新三位中将資盛のりあけり益備中守師盛副將  
軍にと亦内たの信家而見太郎信平を先として  
七千余騎三草山つや世のいりり三里の山を居たて原  
平両市に陣をとる東の山口に九部義経土肥守  
實平をおく一万余騎のたてむたり九部と  
土肥の次郎にのりいけり軍の争ひに五をたれ  
屋をく又明る五つたといはれ土肥に  
いも勝て伊豆國住人田代守若信流とをくらり  
かけりた亦家らより今夜用ひらるる夜  
くぬとまへくひ亦家の勢は七千余騎と云はれ此  
ら一万余騎也とらうの理にてはありとやけれ土肥田  
代灰いしくやされむいたり實平の亦家を居る

中より田代討者とす、伊豆國司為隆、其國のとき、  
友成氏克、娘をありて、まうけたる也、為隆、伊豆を  
上り、其信縁と母方の祖父、友成氏克に、ついで、伊  
豆國、うきとて、うけたり、けるも、子十七、其れは、  
より、浪人、兵衛、佐、見、衆、に入て、官、仕、は、る、も、矢、と  
りて、勝、たる、上、い、く、た、剛、の、若、誓、兵、の、も、た、り、て、聖  
有、り、る、名、揚、の、余、茂、の、時、伊、友、入、り、祐、親、法、師、を  
追、寄、り、て、其、書、を、山、へ、つ、く、も、り、と、兵、也、か、こ、る、  
九、部、の、副、將、軍、に、か、り、と、も、兵、衛、佐、内、へ、を、ら、は、たり、  
俗、中、を、尋、ね、ら、れ、後、三、條、院、の、中、三、王、子、御、子、左、皇、  
有、佐、の、五、代、孫、と、を、聞、く、と、お、と、夜、討、に、か、り、と、  
其、夜、の、丑、の、刻、斗、よ、一、万、余、騎、を、三、草、山、の、西、の、山、口  
を、お、め、た、る、赤、家、十、傳、押、家、たり、赤、家、先、陣、と、  
自、用、心、を、志、し、れ、と、後、陣、と、明、り、の、軍、に、て、を、お、ら、ん、  
あ、ら、ん、と、軍、に、の、孫、や、ま、と、大、事、也、と、い、ふ、と、福  
て、い、ふ、あ、ら、ん、と、て、甲、を、ぬ、け、て、枕、と、或、履、を、と、り、雷  
此、袖、を、た、た、み、て、枕、と、し、て、あ、たり、ら、る、氣、に、押、寄、  
て、時、を、つ、り、て、志、堅、志、の、い、く、つ、を、な、つ、て、言、ひ、し、と、  
通、り、た、れ、と、す、名、揚、と、矢、を、と、り、と、矢、と、ら、者、と、り、を  
從、馬、に、踏、ま、り、け、ら、れ、と、を、お、ら、ん、と、い、て、し、る、と、

物此を有りければ共軍せんとする者二人ありたり  
一は不おるみれとほくつ大將軍勢三位中將と  
追放は化ておる事多し人ほくろしとや只ん  
化けん福系一攻りあす船よふ糸糸と横波國と  
渡りおにあり舟備中守師盛おられた門徳家明の昔  
大臣よの糸りて三草山の去夜の夜半斗に原氏の  
軍兵に出んく追放されぬ橋山の事をむけられ  
るる交ひらんとかたりたれと大臣殿大にまはるん  
て東西の城をを回つての事にて執りをつらする叔父  
右馬助能原を山使しと能原をさる方へおきならし三草  
山此も既に小屋をたれい也一谷一山能原守仲を待たせし  
いぬれありりも見えい生田一山新中納言望まされいハ  
是又心を山のおに盛俊むつとやいハ山ハ大事  
此氣にてい兼いほいおて執りをつら副もやと存い  
いつれの殿系も山ハむつととやいハつとくハ記しり  
はらぬ人むつハ城ありと存いと注作ければ能原守仲  
中まはらる軍とハ免んくに我一人の大事とか  
りいて用んふい忠持結い其にハあふと一其人むけ  
ら此もい覺ふハかとかれらんハと軍に勝事い  
向後りけつとくかろくくと見えの事すされハ



人の上の大車とかれし思ふ所のもろのや但歳彦も小  
いづらん古の教院をいへきいけ化の(今言何ん  
りたり)身をいひいしとして終て義康のふる處に  
ておきて物具いひしとて世のをいけり誠  
いひし費てふいひる程か三草山つ廿川に  
越中前司成後、隆の前より成をきて待つけたり  
去程よりいひいぬ深氏に七を申したるをとて老  
火を三たりいふ家生田か三後せら文行をいひに  
たの空のわしのおとくいふ家の古にり向火湯けとて  
生田の處にいひいのおとくたれりける其後越中

三位ハオの徳登ちのりを屋に物具ぬれて女席ひか  
まうし居のけり徳登ち是をみて十されけるいふ加  
権并とけて流う所のあを此の歎おとて教院いひ  
つとんつれい向て誠いふ所の居れとお説とみてい  
ちをよに持いぬとも矢をいけすいお世のる屋  
矢をばけたりともいひすを程をいひるい上北古  
か歎いふうかいつけていれんははとる物りすい  
すい向しそ物具ぬれかつせおひていあたの用よの  
何とせりい屋と再三おしけれいあ説あうをい  
おはしあつあといつれかよによいすやれにひれい

化て女をのこつた後にはいかに何と問はれり  
小替化を言初のみをのこり衣ありしは化の能  
思ひあつたかといふ

六日卯刻に上の山が岩さるしそまつらきしり  
すもやうまの卒りとも各馬の葉田の諸を志めて  
等高く侍敷しうれふゆす男麻妻麻出来平家  
比人こかけりといふかかんす麻り人小おびれて山  
掠へて入つたに上の麻の志落たか出せ何やとい  
化野に人伏時と飛屋列をすりて云事し何の  
物を衣上の山が欲たうたむ社と云禮小伊年國住

人武智武者處清章と云者大床一いとも女床一をい  
たりてなる心あつたる麻の七殿をとりかけり  
軍と七日卯刻に矢合せりといふと定り義經  
の旗七中に奥に佐友三郎経信四郎兵衛忠信の田  
源三熊谷次郎直實平山武者氣季重片岡八郎  
為治佐原十郎美連後藤兵衛實元を初しとい  
兵三夜余騎りし経につけ強り七千奈騎をら土肥部  
田代冠者西人を大将として山に心をやすめ(我身  
と三草山を打廻てしより越へむかき)何れま  
せけり九郎義經乃れはらりし折本の山何れを

んるる者を馬鹿して何やまらすか誰か此山の案内  
知りて昇るは平山武者處を取直して季重と  
此の山をいれ志りいへ山先んうきりて先陣傳へし  
とやられ然る谷に部とり何處中らるに知り  
武藏國下住居し今始てみ山の案内せんとい  
されり山をすも受へる山にほらんと云ん  
ん人用てはかく山をゆめと云れは季重の  
心好透にら奇人と吉登龍田に分入て花を  
尋ねる花と山此指し面白き谷川の段に  
いんよにりゆにさき其里人志す子共好人

と志れ故の築る城なりしもの山を化と左社何れ  
めといふしそ者出指何ふ者よきて山地季重  
をうちんとしたれといひれは人い是を削て面  
と云くはうんして地何中す傳ける山書子出れ  
あひて傍若輩人ありとれいけりわかくは  
志れ共誠も山は案内志りに兵一人ありとい  
れの谷へおとつれの峰をいけしとい志り  
ける三草山は秋村の時生捕多志りけるを  
屋平いたちやちいれは奴國のり武者のけし  
ちをら木此本に志けり何かとい通るに生捕の

隠依は佛んとて一人く執りたるにけりを先し出でて  
とそまにけり此山は鴨越とて冷しに山にてり  
底にけりしを堀馬り人を通ふ處くはひたけり  
りふみほりしはさ者おとまんとして底に美を想  
ひとせ中りる柳山の山に鹿りけりといふ(いふ)の  
奴床とののけりをとかかりけり世間そく  
りりいふはあふんとて丹波は床と一谷(渡り世  
間暖ふかりけり深草にふりんとて一谷か丹波)  
帰りと中りるはねと鹿とて程の道しを馬とてよ  
いふ事やつれ馬場おんたにいふとせよのあり

此らねと和君と平家此隠依人國にけり武者と  
間化れと平家の人にもいふなり武者たてりいふ  
播磨七國守田庄司賀吉友六之利と中者たてりいふ  
以先祖お傳の處にを故なく平家侍越中前司盛  
俊と中者た押せられてふの二三子の間折中の共  
来をてして死にけり死にけりいふなりいふなり  
取て軍に出せ死にけりいふと存ひて此もたつれていふ  
中りるはねと平家此隠依人かありり誠山の  
案内は利に過りて先にておんしをるは  
二月六日の事なれとすいふやがらういふく月を

おもしろく四方をに、しく志を以て杉原に嶽々の麓  
小橋を此のりの霞花々とみゆり流るり白雲をり  
てにうきせむいたる流りありと十九の谷峰  
くしてなるく深山にと春の雪たにたえやそ  
昔乃のせきたるか也木の梢よりふれ、友すしハ  
せり流るり有けり程た月り高峯にたれて山は錫  
ふくしてさみしたる流りありと夢にさそは  
あ地しく馬次やたるとる程ふ款の城のうし流  
あり鴨越にせりありける流りありと中流り  
と河ににみへる流り大物浦難波に浦出やけし井出

此流り流るりの里と中ハ河のあたりと南を流り  
流島西ハ明石の浦とすは流り火のみ  
あり播磨の国境西國内には才一の谷  
あり一谷と中流りありと岩すりの白  
砂ありて馬とをん、一谷は大事流りにて  
ハ盤石たたくせむいたる馬の足三匹  
みへるありけりして中流りありと馬介のを  
たると云事あり、東西ハ城戸の上のうしの名ハ  
壇とてありけり、ふみ流りして眺る面白く望  
海樓を挿へる、西のおつ高峯の原とて

其の風秋は嵐の音に激にけりし處にて  
の也と名中より大將軍はよとの侍ちりて  
おのしをうたをふく其外此兵と東西の城戸  
口に二重に屋形あつての也と矢取れりて  
て名悲しく間室山水島の軍に度々命を  
授て合戦仕り流た只いり志りあぬをし  
ハ今うの始てその子何をも見参に入ら  
すり世に九部義經と名りて原山の道に  
いつく共志しにわづらふつゝわづらふつゝ  
んたる由上を二後せとふれあくの眞火海人

れと名を此より曰火りと常司面ありはけり  
えにたへも兵杖是足をハ口とさうせぬ  
よ是にて款をすのれち物奪えて高谷せよ動切に  
名り應としてそれこれおの月出たる扇を古  
美六に給りけり未夜你をけ礼と志けりく  
馬七足を足すのける大子七城ハよとの鶴と  
隙をもとをし一ををぬくいりり越前三位  
中三草山のよにむらりける陳の火みおと  
ゆりて北北名に火をたのみたりけり大子の兵是を  
みて九部小常司志てた城戸たつたりり

うてやとて我先にかきんと五万金路のよまに續  
書を携<sup>モツ</sup>て急ききり素い小火をはかりこれに方灯  
けおとく生田のあはれてつれたり海上ひり降り  
てその乞もよたちておいた——源氏平家の陣  
此火ふぬ素燈ぶるをり熊谷次命子息小次郎  
にゆけり此大勢にぶして山をさきに高谷やま  
の是るま——其上明の軍と井あみにてこれ先と  
云書りゆりし今度の合戦に一方の先を滅た  
ると無衛佐をにれこれとありおはるとの  
ゆえに兵衛殿の总侍共を一同素にこい入て今

度此軍にこい一人をたのせと素あり法<sup>ハ</sup>をさるん  
軍に於ては志を尽——て頼朝をうらみよとのま  
直実りかくゆられたるを兼りて一方の先を心小  
かくいさした小次郎西に古が播六に下て一谷<sup>ハ</sup>  
先せん邦の時の矢合ふれとたて命の始にてゆん  
お出んと志るるのゆもれ平山の先を心小成らると  
ゆ物を平山の前たやふの山をゆめんと思て十人  
をきりて平山素るをみせけ素下人けりて  
中りり平山との陣に唯今馬をみゆりて  
けにゆ其上ゆ物具百とゆのと思——てゆゆひの

くは十のさすのふれあへぬ此を馬と見え  
鞍置てついで斗はりしてせ給りひうへておふ  
の平山を七四と名と見え一とて八幡大おの  
りお見えよ今日の軍にさすり先せんすりお  
をといとかけれぬ徳谷はれとせ給と思ひて小笠  
直家と旗さしきたに三崎にて濱海をみまはしに  
心を批けて打出の森に武者おや四五騎出来れ  
中少れけらたに今おに出来る者お荷者と名れ  
つと尋らるおお印け九郎の曹司はお名と聞て  
直實、かけると是は直實にてお君の所出と氣りて

以下は移載  
多不審  
疑は脱向なる

小供と名れりかけら後には中少れぬ山曹司の事  
其時聞たりとて而千のおおはれ身に何て見え  
化たらんは是くは過とておせ給くくはつとせ中  
より山曹司と名れり我を先にやら物屋の又款  
や籠来と思て夜廻りしおひらるあついと名れり  
たると此おひてひれよりける氣に供おら屋にて  
おれ是に山曹司のゆきをせらる抑おれは(おら道)此  
案内志すぬおつとせんあつとつとつとつとつと  
山にさしつとて笑礼て攻りておらつとつとつと  
とかけれと小次郎と名れら武藏國にて何人の中



ひく山にすうる取事と屋敷に事にてひや山  
信を下り谷に中々のりりつひいより人里へ出ると山  
中ひれはありあんと山次七五りらるを志る  
にて下る程に思ひのふとく播磨の渚におん  
て七の卯刻斗に一谷の西の城戸口をへ家て  
み北の城廓の構へ杭誠におんたこし陸に上  
北山はふりし追大木を切伏て其影小敷百  
は地をみ居たり渚に山の本禁か海のを海  
す大石をたふて大船敷を志るまそこのまに  
松百疋の馬を十疋サをに牽ふたり渚にと敷  
艘七すけ船をうたりけれとたや多くをひ  
屋しとみふり危然谷の次齋直実ハ福衣の  
書いたれに細村濃の上の母衣掛て  
う人より毛と云馬に黒鞍をたてせりたり  
大中黒此夫廿四差たるのしあふおいて二  
七の肥と免てふとくはゆけるをせ持りり  
子息小次齋直家の次浮を慮ふすりたる直  
に友かえめの言に鹿毛ある馬小黒鞍置てと  
たりぬる鎮まふ秋野よのすりたるひたれ  
らいかえれをぬいて三すん甲をたて黒袴充  
たる

馬は谷の志と流とせざる誠の一物也此馬は陸奥栗  
原もこのと云流の牧か出たり尾髪にさすく志流  
りりけ礼ハ白波と名付りりる熊谷父子二騎城戸口  
あつく責きて武藏國住人熊谷六郎直實嫡子小  
次郎直家生ひ十六歳ついでて聞ゆん物を成と  
言ん人ハ楠木表にけ出よと以ひて父子二川  
流を并て池七参りけ北共出合者ふりたりた計  
遠火にさしにせいけり熊谷馬のやと腹いし  
勢てもこのおと持ハつあみおとくありたり是こ  
術をとりやけち杖につれて城の内をにらまへ

て中りると去る此をわ換國濃倉をさす一日命  
を兵衛佐殿にまじりつひをさ一谷たさる一谷  
をハ後代にとつて一守家の侍共は合也くと  
大音上げて此志りけれ共合者ふりたり宝山  
水島二々度此合戦に高名志りいと云るり越中  
六郎直家愛七之郎上総前直家ハなれた高名ハ故小  
作て此すらの直實ハやしたのひそハ高名えせ  
これ能登る殿ハハハ持ぬ。あふまゆ人の殿京  
や返出て継やくと云り此共返合者ふりり危良  
久待もくは合て城戸口上の高矢倉ハ雨の際

わたくし村にる矢をた 富の袖をふりぬをせしして  
たいてい勝る然谷子息直家に云けらるる歎よ  
れいといはもく事なせと上徳むのいむ事此徳を  
甲のちろしやたつて、ゆれすをおしきてい合く  
してさしに上徳むの地境りまた、上徳むの裡かす  
かともいひけるゆら程ふ夜りかのくともゆれは  
然谷すいゆるるを平山、九節、曹子此供、山  
らよりおとゆら、後此手にいふ、是はけしららば  
いよつらん物をもと、父子いひて三たる氣にいひ  
りもてぬに、濱此方か平山武者子舞うお果す  
二騎出来り平山志けのゆひのひた、れに赤のおとし  
此書に三枚甲にう、佐、取のをゆきけて川をけしと  
云馬にたて、糸たりける舞、ゆら、黒糸おとしの  
上徳むの小三枚甲を地よりり、然谷す山をみて  
ゆれは平山、後と云れは、季重とふのりて城戸  
口、責よりゆれはゆれは、社とせや、ゆるる、平山、ゆるる、  
季重りの重なる、ゆら、つる、成田、お、す、す、り、  
て、今と、や、の、小、ゆら、り、た、り、や、成、田、云、ゆ、ら、ゆ、れ、を、か  
くと云、兵、大、勝、を、後、よ、ゆ、て、ゆ、れ、か、る、事、ふ、れ、た、し  
一、騎、け、入、た、る、と、百、に、一、命、い、死、た、り、共、た、れ、ゆ、人、り

三層に後陣を侍し三にけりしありのいで志をら  
く扣て侍氣に登って成田志く此のる此君の志を  
をたしぬくよ其後ありし馬は尻にいつくす  
れ其てよりの馬とよはす物をとて可正にりて  
一少ちめて、向しちせつれ二三人斗はりつらと  
又つらのゆへに古五丁さうりつらんたはありし馬  
もくて、先をくくる事かありすし、物を懸る夜の  
馬と志を、馬は向しれ逸物也とせりるの云く、  
城の矢倉を二重にりて上には、お家の侍十  
少部、小園、此兵も、巻指たり、唇を、替へて屋形  
をおて、大將軍のりたり、口一ッ完たり、けれ、  
くが、け入、一、共、二、へ、けり、り

### 一谷合戦の事

其後城内より、一、夜、りか、加、了、悪、口、一、つ、る、懸、谷  
い、十、り、小、せん、し、越、中、以、命、無、間、盛、攻、上、結、兵、部、志  
光、同、志、七、兵、部、景、清、飛、弾、三、部、た、門、景、純、後、友、内、定、徳  
以下、究竟、の、若、武者、六、十、三、騎、城、戸、の、す、り、あ、を、引  
込、け、せ、て、二、川、を、あ、つ、つ、て、お、免、い、て、う、け、出、たり、越、中  
兵、部、無、間、盛、攻、十、川、の、ま、り、て、出、来、小、此、む、装、束、を、れ  
と、緋、村、濃、いた、れ、小、未、終、は、上、終、ひ、小、志、を、け、り、の、甲、た

白草毛の馬に共乗にけり然谷におくわうへ  
てそちんと志れ共乗も志り共す父子のいも  
ありすたりたり危越中此節無窮一にん斗をてて、  
和君之小御ひてと命平佐す一此を大將軍に合て  
此を組たりれと云れ然谷にたかしくあやしく  
と地中此を越中此節無窮いへたをさうとる思ん  
思七節無窮二節無窮を先てふかしくあけきり  
を此節無窮中此を口々の君の小大事此にうた  
りす一河化程のふとさひ小御ひて命をさうかひて  
世人かしく殿くと云れ思七節無窮けはりりり廿三

此のれ者共然谷に平山をりり互小戦斗也平山をり  
其時迄誰共志共然谷の部おつとて平家の古比  
人とあひて目か言者かうりる城戸口を閉じた  
るを欲て遠く思たりけ今八月にもよ武藏國  
住人平山武者氣重今この軍は先名乗ておめ  
以て城中、掛入ぬれをて城内雲霧の如くあはけり  
高矢倉の上り其界にあやくとあやくに言  
れ共平山を乗に馬と逸物也城内の者共乗にわ  
馬と船小乗たりたり疲損に別一町てあてたりと  
たふれぬとれか此後一にを會者あうりり廿三

共然谷父子を打倒して平山より一泊を追てせうけたり  
比平山の麓よりとう法<sup>た</sup>勢<sup>て</sup>其敵平山打て其首を  
かくしたる然谷父子は廿二泊の後につひてうけ入ぬ  
三泊は若共平山をもちめす城内にうけ入て然谷  
平山を外権にかしてせ<sup>せ</sup>最<sup>も</sup>然谷少将直家せ  
ひ十六歳軍と今日始<sup>は</sup>り<sup>の</sup>とてう<sup>い</sup>たて<sup>て</sup>は<sup>は</sup>降<sup>に</sup>責<sup>よ</sup>  
せ<sup>て</sup>戦<sup>け</sup>ら<sup>る</sup>小<sup>は</sup>ち<sup>を</sup>守<sup>り</sup>て<sup>は</sup>比<sup>志</sup>り<sup>せ</sup>く<sup>平</sup>山<sup>麓</sup>  
内<sup>を</sup>し<sup>し</sup>せ<sup>たり</sup>け<sup>れ</sup>比<sup>共</sup>城<sup>戸</sup>口<sup>に</sup>守<sup>り</sup>け<sup>れ</sup>比<sup>平</sup>山<sup>と</sup>  
平山と先<sup>に</sup>掛<sup>入</sup>ぬ<sup>に</sup>扱<sup>出</sup>然谷平山と一陣二陣を  
う<sup>り</sup>せ<sup>る</sup>の<sup>事</sup>是<sup>也</sup>と<sup>し</sup>る<sup>に</sup>然<sup>小</sup>西<sup>の</sup>藩<sup>が</sup>成<sup>田</sup>五<sup>郎</sup>廿<sup>二</sup>泊<sup>の</sup>  
か<sup>り</sup>て<sup>は</sup>比<sup>共</sup>城<sup>戸</sup>口<sup>に</sup>守<sup>り</sup>て<sup>は</sup>又<sup>も</sup>比<sup>共</sup>藩<sup>が</sup>出<sup>来</sup>然<sup>谷</sup>  
泉<sup>を</sup>み<sup>て</sup>誰<sup>人</sup>に<sup>て</sup>か<sup>を</sup>し<sup>し</sup>た<sup>ん</sup>也<sup>と</sup>こ<sup>い</sup>ひ<sup>れ</sup>比<sup>信</sup>  
濃<sup>國</sup>住<sup>人</sup>村<sup>上</sup>次<sup>郎</sup>判<sup>友</sup>代<sup>基</sup>國<sup>と</sup>名<sup>乗</sup>て<sup>お</sup>の<sup>い</sup>て  
かく是<sup>を</sup>初<sup>と</sup>し<sup>て</sup>秩<sup>入</sup>足<sup>利</sup>武<sup>田</sup>吉<sup>田</sup>三<sup>浦</sup>鈴<sup>倉</sup>  
其<sup>外</sup>小<sup>沢</sup>横<sup>山</sup>兎<sup>玉</sup>猪<sup>俣</sup>野<sup>寺</sup>山<sup>口</sup>の<sup>者</sup>共<sup>我</sup>お<sup>と</sup>り  
し<sup>し</sup>り<sup>入</sup>て<sup>は</sup>源<sup>平</sup>兩<sup>家</sup>白<sup>旗</sup>赤<sup>も</sup>お<sup>や</sup>し<sup>を</sup>せ<sup>ら</sup>る  
大<sup>に</sup>面<sup>白</sup>比<sup>龍</sup>田<sup>山</sup>の<sup>秋</sup>は<sup>毫</sup>白<sup>雲</sup>り<sup>る</sup>お<sup>茶</sup>の  
風<sup>系</sup>ら<sup>れ</sup>系<sup>を</sup>お<sup>も</sup>た<sup>る</sup>い<sup>ふ</sup>乱<sup>り</sup>ひ<sup>て</sup>お<sup>の</sup>れ<sup>け</sup>け<sup>し</sup>  
赤<sup>山</sup>を<sup>む</sup>し<sup>し</sup>馬<sup>を</sup>お<sup>ち</sup>し<sup>し</sup>お<sup>と</sup>大<sup>地</sup>震<sup>い</sup>り<sup>は</sup>ち<sup>の</sup>  
お<sup>と</sup>し<sup>し</sup>但<sup>て</sup>あ<sup>る</sup>者<sup>ら</sup>り<sup>あ</sup>る<sup>者</sup>り<sup>あ</sup>る<sup>者</sup>り<sup>源</sup>平<sup>い</sup>

此れ後、つりきり、つりたる熊谷平山馬の足休、家  
身も息つゝんとて引退く時、母衣をのろふ、つら、つら、  
又、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
家の軍兵、おろし、おろし、おろし、おろし、おろし、おろし、  
つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
七千余、三草山、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
一谷、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
城戸、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
に引揚、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、

分藩、尉者、花頼、大將軍、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
白旗、其、戦、を、志、す、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
を、お、ろ、し、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
者、多、く、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
次、部、盛、直、先、才、二、人、を、奉、り、つら、つら、つら、つら、  
城、戸、に、責、ら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
城、内、に、入、り、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
兄、弟、の、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
究竟、の、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、  
つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、つら、

いたりあるの何れか部々ありのくつりのもつれをい  
内せて勝すくみてる杖にすうてて居たりはるをや  
以て二れ矢張り系次命のこれ勝のふふつり  
けれと兄と一枕小たを化けり志満の十人落向いて  
取ておさへてええう頭をきていつたにり梶原お三六  
化をみて口懐し足殿系かついて人のいづれを社河原  
太節えええをえういけたり何しろ者共をともて高家孫  
おし家て足徳共にはりめ本にけり勝ておめひて矢  
いれと新中納言大父子本三位中將重初り此千重孫  
にて梶原を中に取寄て一時中戦たるの世場かりけれ  
あけたてられていれ志りおと部共には原をのりぬ  
と云つゝ原を左の大勢の中に取こられて戦つれうい  
れてりおんすらんといれれ、梶原にくまのあま志れん  
うや原をうい勝て、系次一人いれのありたるいれ  
を居すといすい押寄て相換國七住人海倉に権  
云部系次、系次梶原お三、新中一人當千の兵也たれ、  
面をあらうと居たし云てかけ入たりけれ、右のてにや  
おのけん城内の兵共といれてせむれはる原をとい  
すい、これあし、款三孫中にれゆられて大つかに



成て岩窟小後を病て、軍を了りと最り権平の  
け入て後何れをてして原を志後にかゝて  
自身と矢面にたつたものゆゑに射もひて原を  
にいつつて獲ていぬる原をとていつれて受け継り  
て出たり、権平の二度言とて是也権平原  
大の時をいづるをいけか時をいづるを  
是なりをぬれてたひく入也、最る武蔵守の  
くくみ、る中に死する書と片をもる物のまじ  
たうりあるを一枚取て是のまじりして最の中へ  
城入難めりむ時、物に原をたつてあはれけれと  
うのれり、是をみてうん、る岩城のまじり三度中  
のまじりの福衣は直垂、つひの書の取て馬に  
せうすろ、賜ふをいふ、ちりり、本三位中務大臣  
俊中、物にあらぬ、つひの中務といふ、あはれけれ  
物にあらぬ、つひの原を馬にたつて志をうく  
いづる、中のまじり、〇生取といふ、あはれけれ  
中たりり、九節義経、一谷の上津依とあり、乃と云  
原へちたうりて、これ、軍にたつ、あはれけれ、つひ、たり下を  
みふりせと、或は捨つ平のまじり、或はサテ、斗の山、  
有人り馬、つひ、あはれけれ、つひ、馬あり、あはれ



せんより目をぬられたる馬小任せてたつたのしるし  
おとりのしるし  
よりんりろとらるせや  
ゆふみしるしをくさるまるとかおとーけれとおち  
おとりのしるし  
とよのりたる七千乗時此無共一かおとらしとみ  
かおとら山と未幾雷にうすまの矢おひてみる月  
とし名馬農ふとくたくましくれおとらたりけち  
あちち小月のまちありけれと三月とをつけたりしか  
一誇り換せず城とくく後よりを形の手おにたおちいた  
たるおとーそのれ白旗平流をうり河のときど  
けておとら換万船の中一乱入て時をとらと化し花  
八節りみれ歌にたみつけるうい何をとすしと花を危  
あか馬が引落く村落とひととあちちとめれて上  
あちり下のやけり程小城のうし後此うまをか火を  
うけたし花白風をけく吹て猛火城の上へふた  
おちひけちをくけしうりにむせひて目をみわけつと  
るおちしり河へあほへたみ池入けりはすけ船が支  
たりれ昔船とたみおちすらん海小沈し若おおかり  
ける氣ととら名場られたりー総登まの如く思をれ  
けん平武者うす雲と云馬小乗て後へは昇るへ  
後縁してまが船おて清波の岩を、岸のむの越  
中筋目おとてり造らつた身あつたおと一引り引す

此ありそまき中て最り盛後、猪股、小栗、六郎、信と  
よめてゆをせて引繼て馬の尻をけり、盛後ハ世小  
尾あへにる、大カハ、大嘴成り人ハ三十人のカ持たりと  
志られ、北兵由ハ七羽人志てお後、一けら大船を一  
人志し、そを、と向けのお後、一けり、小栗、六  
郎志た、そ者、そ者、そ、そ、強りけ、北兵志、そ、そ  
に、おられ、て、盛後、す、お、一、お、御、小栗、六、カ、を、ぬ  
え、と、つ、小、を、う、け、に、れ、大、胃、の、大、カ、の、込、て  
お、へ、り、け、れ、と、カ、を、ぬ、く、小、栗、友、既、小、首、か、ん、と  
志、げ、お、小、栗、の、首、の、印、と、ヤ、カ、ハ、お、あ、り、け、れ、小、栗、六

中、栗、六、郎、教、で、よ、の、ハ、誰、と、云、れ、教、を、う、つ、法、一、と、名  
字、を、た、し、う、小、栗、志、て、お、た、れ、と、志、動、心、の、切、書、り、  
取、り、れ、名、り、志、し、ぬ、首、を、い、ら、志、たり、と、そ、り、抄、の、傳、小  
栗、の、首、我、志、れ、り、つ、を、取、け、お、つ、る、と、志、れ、ハ、結、り、お、志  
と、お、り、お、り、ハ、名、れ、り、て、れ、お、志、る、と、志、武、志、國、住、人、猪、股  
小、栗、六、郎、信、と、志、志、の、昔、り、兵、衛、佐、殿、す、と、志、  
志、た、り、此、ハ、及、志、ハ、志、軍、志、れ、ハ、則、信、と、志、ら、て、ハ、何、と  
の、し、る、に、お、志、お、志、勝、り、と、志、今、り、お、志、  
され、ハ、志、小、栗、お、志、志、ハ、志、動、心、の、勸、賞、少、り、志、り、志  
と、志、志、志、志、人、志、則、信、命、助、志、た、り、ハ、兵、衛、佐、殿

かちて和殿の志し一尺人共五ハ何れ人ハ助けを  
するといふ知者ハ誰と云人共と云れハ是ハ重  
侍越中若目盛俊と云覺う一門して何れ  
を以て侍ふたれ也扱ハ殿ハ聞中の人共何れ  
と云れハあはれ一盛俊いひるれ子供多き男  
子女子此間ハ廿余人共あはれハ助ケル一定  
といふ子細ハ及いて命を助けにらん人を  
ハ助ケ中あり居たハ幡大菩薩此罪何たり  
んいって宣書をとりと云れハあはれ一  
此書リハ首をくはに及ぬれハ力をも  
引をとりて助たり後ハ原田若ハあ田中にかり  
此ありあはれ盛と一ハ馬のたひかとして二人ハ  
者共と尻打ちしていたつたたりハ楯ハ楯股  
堂ハ人見四郎と云者黒糸綴の景ハ河原をた  
馬ハ乗りて濱の方ハ出来にり盛俊ハ重六にハ  
サとけて目ハつけた人見四郎ハ目をかけ  
てあはれ来武者ハ何者かと問て何れハ一ハ  
思ひにりハ重六すあハあはれハ刺傷  
ハ母古ハ役人見四郎と云者也覚えなく思ひ  
あはれハと云れハ人見ハ目をかけて楯股

に心あはれいふ事をもし、たゞ勝てゐたり別縁  
人見を待合てうらたうと二人走て出立たれど  
いふ人と思ひし後ををりて先づ強かつた  
たれ、盛俊すま、極小の田のあゝの底、淵頭をの  
れ出みて足うつふ有りておれん、とくけり別  
縁したとて、居てとつておれ、おれ、とてす  
刀をぬいてつり出あゝ、通れとしてあゝてヤ  
うて頭をうめそ大刀たさたふ、つらぬたう、上  
て中よりとれ山ゆり、予置の侍越中、盛俊、とて  
是正しく別縁出れをうらたり、説人にさる、この

東と共十ヶかの刀ハ浪平、他也つゝおれ、葉小竹を  
のり、曾たわし、共、剛つゝ、赤猪股堂、小茂田三郎大夫  
ハ、入て、戦、なるの、姉、も、小武藏國住人、江戸部  
として、七に、向、若武者、後田を、と、教、と思て、よし、也  
遠矢に、射、たり、けれ、母方、の、徳、文、と、あり、何、の、れ、を  
拍、み、ん、と、の、取、の、り、を、い、たり、けれ、い、ふ、ん、て、い、と、を、  
たる、素、を、け、は、民、部、大、夫、成、長、と、相、掬、葉、外、記、大、夫  
長、連、と、部、守、者、を、合、て、あ、て、け、り、お、れ、小、思、ひ、い、く、小  
戦、短、小、大、事、の、城、戸、口、を、し、て、懸、谷、平、お、け、入、信  
濃、源、氏、村、上、判、及、代、基、國、家、永、来、此、後、故、小、火、を、の

けはれは西に風冷しど黒煙東に吹渡りて東の天  
子生田の處をよめたる軍兵果をみて今はいかに  
か叶はしとして船に乗んと渚小舟の者唯は海に  
み入る助船のれ共あはくゆてはるれ川の前は  
船二艘乗志川ゆの志人こそせせ中一つま  
七者をハハ守るるふんとそ船小舟の者あはく大刀長  
刀をひてふれりれいふちと切りそ者あはくせら  
れしれ者欲にわいて死ふんとせせありけりた  
いふもしそ船小舟のれと志るるれ古折山共  
おろくろしれ小舟りしえ帝を護りて女院北政所

二徳友以下に女席を大匠を以て古折山の志人ハ  
船小舟に在りて海上に浮ひ居りし者  
護摩寺忠度被討事

一谷乃渚を西つりて武者一騎を以てよむひ  
斗の人鬘黒あつ黒草おとりの田白毛色のみつ  
程あり材あしたるとかばりててびらふ大中黒ハ  
矢口五羽にりしうのむある馬小まをへらしたる鞍  
おけて山小舟の鞍にてそ乗たりけり引之し  
くわし色をわつあけりを武藏國任人岡部六弥  
太志澄と云者けあけてきたたり一騎あり

にきや歎つた方々、名乗り(と云はれ)由事をも言た  
り、志澄を懸うのむいて、みれば、うき、うき、たり  
源氏の市に、は、う、ひ、り、る、人、は、え、つ、ぬ、者、を、し、田、で、れ  
た、か、う、か、た、れ、ふ、う、う、後、を、み、習、り、し、ぬ、れ、と、つ、た  
忠度、六、孫、を、に、お、し、り、つ、つ、て、繼、て、馬、走、り、あ、い、し、小、倉  
て、より、忠、度、を、あ、り、田、小、三、刀、を、ま、た、を、あ、す、一、の、刀、と  
ふ、う、い、を、つ、た、二、の、刀、は、口、を、つ、た、三、刀、は、う、ち、田、を、は、ま、  
た、れ、い、か、う、つ、た、つ、つ、ぬ、れ、たり、六、孫、を、神、字、為、人、を、  
う、ち、刀、を、り、て、忠、度、の、う、ち、の、う、い、を、り、て、折、お、と、ん  
ゆ、れ、き、忠、度、が、う、い、ひ、き、り、た、め、て、の、う、い、は、小、六、孫、を、  
た、せ、て、三、ひ、ら、も、う、り、あ、け、り、れ、り、忠、澄、を、れ、何、り、て、忠  
度、に、く、じ、上、た、の、り、あ、て、を、ま、つ、て、誰、人、を、名、乗、り、(と  
云、お、の、れ、に、お、い、て、小、倉、の、う、い、に、お、の、れ、を、  
ら、ぬ、社、人、あ、り、ぬ、去、り、う、ち、結、節、堂、に、は、あ、つ、う、ん  
す、め、と、き、い、を、れ、け、り、六、孫、を、神、字、為、り、あ、り、て、忠、度  
比、雷、の、う、い、の、り、を、ひ、た、け、て、ま、ん、忠、澄、の、か、た、け、の  
名、の、う、い、と、も、う、い、と、お、お、し、て、す、の、う、い、は、う、い、  
刀、を、ぬ、れ、う、ち、甲、を、ま、ん、り、と、み、た、う、い、は、う、い、  
に、免、忠、澄、頭、を、太、刀、の、先、ぶ、つ、ぬ、た、て、此、頭、を、名、の  
れ、と、云、は、れ、き、不、名、乗、た、れ、人、や、ん、と、思、ひ、ま、る、ふ



志のく小を物一卷さへたり是をいひして  
けふ旅宿の花と云題小

初言て本下巻を意とせと花さ也今宵の月か引らん  
と申くおふ歳上とかけたりけう程小出忠度と  
志りたりと忠澄無所依夜の見参小入て薩守正  
未知らく素五二何けりて忠澄の給りける

本三位中將被生捕事

本三位中將重衡公生田の表の大將軍少てあわ  
りる國に此加り武者を共取集て三千余騎斗を  
をりん城内至ふんたりとみれけりて

方へ海をぬかして耻を志り谷をおしむ程の者  
みかふににけりけりけりけりけりけりけり  
山に降りぬ地れり生るとすらく死る者多くは  
ける中將其日の裾衣小村千をぬかたむけれり  
此景すまの書に童子麻光と云て兄の大臣より信  
る馬小乗れり花中の力常小共みへられけり中  
將がし大軍向ふにけりてにせんとして心来むけり  
くしにれりり多夜目か一月名と云馬小ハ一氣小  
志めんとちたりあつて後後無敵盛長と云侍に  
此流て身をまはしたすくせられたり此方と云

為てらん水にすけ船共おれた中一にらん西を  
て河ゆきをけり後の島を打過てふりとおを打渡り  
ておまの川釣のをを——をとちりふふり——蓮池を  
めておる——て板屋の頂磨にたかおまの路をたけり  
乃浦の浦に活てひる——為らんらんをふり流氏  
侍松原守三景時たてし一橋お具——て中ね目を打  
て追掛たり中ねおまの童子つけと早急の逸物也  
れした、七おまをせらんらん景時ふり——とや思ひん  
り——と追掛に遠矢に射たりけりお童子座元お  
んすのおふたにたらん馬お矢三て後いふおまを合せ

給——お働らん盛長おれをみて思ひらんわいふも  
れり後——と教責来木の馬おれおらふり  
とおのさうへいおれ命おれ大切おれと思いておむけの袖  
おらふらう——おらうおれとふりけりおらふりおてひり  
みておくおれおれをみておれおれおらふり盛長よ——お  
おらふらう——おれをすていつくおのちおれ馬おれ  
よ——とおれをたけてのおらふりおらふりおらふり  
おらふりおれおれおらふりおらふりおらふりおれお  
りおれお馬おらふりおれおらふりおらふりおらふり  
て刀をぬきおの引おれを志けりたりむかえつ——て

小奥足ちり控られ控られ自害せんともゆ  
いらんとあつひ川らひぬたれ解きておれたり敵  
責子興れ自害すたれまゝ一幸を海よりたれゆ  
つり入りしたる程小橋系平三とせ舟を馬をた下長刀  
をひらきてかきあつて中より景時を君のやとらせ  
ぬとみまゝおれむつふ集りぬつり之の近きお母  
下にみるくくつふおまきく振る侍も三使をたれ  
中んとかてさくつ馬小おれつとしてお乗たる馬小  
お乗りてさく繩を流の若狛志の舟を御身と  
舟おれりて先お立て替いすりける大將軍いけの

の捕られりる社口懐けけ重衡流小おれひりる其時  
言葉をつりたりしをたしく三百のほおたて一度  
おし子をゆられたらん是に八すあらしとせえん  
しと替此おひける盛長おまをた逸物おれせけれ  
おをせこれにて命をうたすりおたり流小熱野法師  
小雄中法橋と中より傳の海家おりはえんして替  
おけり彼の又折お有りて後白河法皇此傳奏し  
おひりる人のえん系りるお盛長供たりたり人礼  
をみて中より本三位中おのすおいとふおきおひ  
しに一素にていりりるお中おれたらぬおの

此思ふに何事なれん此志りゆればたあらてそれふりまじ  
つる社おらんあれと人何さみりれ盛長はたの物ま  
しくあひひておれけりおを解りよふくありき

### 新中納言知盛船乗給ふ事

新中納言知盛の武蔵國代國主にておそくは  
兜書堂二志しきりけりや武者一語もわづ来て大將  
軍にかけ<sup>せ</sup>おは後しくいへ今ハ何をもれぬ  
願ふ人とかりれ中納言とし務をみるり多し  
多り次おしひたり大正に能れにルかと乃あひて  
流しむれを何中書せ給船もふれおす一漕山

けれにせおるして何れにせおるなりし  
藤原の勢にあらぬ玉堂にや三語おのひてかけき  
を新中納言侍監物太郎頼賢とて強弓のふ上  
にて何れけりよふいそり何事しす藤原の  
骨をい法勢てさう藤原に藤原のけりとも志  
らん<sup>志</sup>法勢をさうわけておせけり中納言の  
武蔵守知明中に居たりとて組て居ておさへて  
そのけりいなるを敵の量おち合せて武蔵守を  
けりり監物太郎又藤原を量る首目を頼賢  
りいあふ一をい法勢にち何りし藤原切死

はり此河小中納言のひまひぬ井上といふ逸物の  
馬小乃よりひたりけし海上三斗船て船より  
船より船り所かくて馬ををるるなりなり  
中納言の船より乗換りてこの馬を破り引ひけて一  
ふち向て船よりけし船に乗りて二三度迄遊遊士  
よりけし共々するけしなりなりけし遊れり  
て欲の物ふかりなり射止れり多し河民衆  
成良なりん欲の物にぬきなり命ををるる馬を  
いそ射止れり馬はとるけし馬を渡ふなりなり  
の別て志なりと志て馬をぬき共々けし馬を渡り  
すれりなりなり船に乗りて馬をりて二三度か  
ないてなりなり志けし馬をりなりなり此  
馬を取て院へ法進たりなり名なり馬なりりて水  
屋ふたりなり黒馬なりとくたなりなりにて  
有る中納言武藏守國替り時河越と云ふ家信濃小  
次郎と云者なりなりなり河越黒と法けりなり  
又井上よりなりなり馬を乗りて秘法して馬は  
いなりなりなり博士と中陰湯師に月小一度泰山  
府君法政なり其故なり今度大軍に此馬に助け  
られて小命なりなり馬は命も生にけりなり

人中けり

経盛子息敦盛被討事

爰に赤地にけり此れ直垂赤威此由の志しけり  
大甲に滋養此より切ふ矢を以て合化り此大  
刀を以て月毛の馬にせんふく人此鞍置て此の  
ふ所の志りのいづけて乗たる武者一人中納言に續  
てお入ておし沈たり一乃ん斗がたててこれ此志川み  
ぬたよむたり然谷此節 直實 諸ふお立らるるこれ  
をみて大將軍と此をえりぬ(す)はるる諸者を返す  
せりやと自りけられてめのお思ひ人諸むれを

遊せけり馬れ向したの程小成にこれ此をわけぬ  
大刀ぬれたたふ向ておあひて池向て然谷傳まけ  
たり事なれにけりたてて組と浪打れふとくと  
お川上にありやにあり三もなれにけり組にれ此終ふ  
然谷たにあり右右の社を望つとあつたにけりけ  
にらうた然谷刀をぬれさうち甲つをを入れてつけて  
それと數十廿六斗あり若上福はすすけ志やうして  
うの黒あり然谷あかいつと中と此後もくそんて  
邦君とにれ人の此子を渡らせおはうとすれを  
問ければとく此れ是れなり直實又中よりと雜

人代中に控置奉らせん事は余りのつとむる  
思ひ奉らせし由名をつとめ小養てうあつんは孝養  
を中ひつし是武藏國住人徳谷右衛門直實と申者  
うら也と申たりけれは仰のかくみ早晚の前面と云事  
ゆふれにふれ程ふあけを思ひ不便ふれと思ふれ  
けれは家々大政入道の才修理大夫は徳盛と申子大夫  
敦盛とて生心十六歳にゆふをや取れとてゆふは徳  
小とに衣にありして直實の子息直家り生心七也  
ゆふの誓ひ一叔と家子と同心にてあはし十んや  
この命を授け軍をすたり直家と申の世をおもひ故に

我子をありし十にふれ人の親り思ひし是此殿一人  
うふに共無別他殿ありし是れ軍によりはけ給ひし  
うらたり共すけゆふ程ふ誓れにもふ程うす敦盛  
うとに以し聞ひひて徳盛いふあけはゆふんあふん  
かと思ひぬむけは程ふう志後ゆふんてあふ者ゆふり  
そふ者ありゆふけは程ふ土肥左衛門直平三十歳ゆふ未  
れは土肥左衛門ゆふ志にてふの者を物けたらふ徳谷  
ゆふゆふ志ゆふ程ふゆふとてけりと無別他殿ゆふり  
ゆふれゆふれゆふんゆふ程ふゆふを思ひゆふ志をに  
今ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

春におのそと直實 絶く仕い庭くそと目をふあす  
首をうたえけり 浪打れまたふくたりけちむく歌を  
区しそふれは 祢りぬれふ五色の糸をよめて 九十九箇本を  
滝たりひたれ 糸を垂れぬれに 雨を引はけて 石  
を漢竹の 笛築は色を川うたを 紫檀いへん入て引  
合ふせぬれたる 抄れに 布をぬきぬれ せられた  
り 糸をそふ 糸をひきひきをりの 程ふすんぬらりと  
覚くそと 四季と長歌をうたたり 櫻梅桃李と春  
初小成ぬれと 采はすつら 鶯の野邊にたのめ  
くふちりして 野絶れ 雲取てせしりの 桜いりや志ん

く内ちりん 八重梅九度三伏の 夏の天に成ぬれと 夏  
浪蕨く 時をよれく せり火志りて 志れぬる志  
たふ地あふ 芙蓉紫蘭の 秋に成ぬれと 秋をた  
すたくれりく 秋のくも 風身に志みて 妻を志  
たふら母なる 白菊芙蓉 春に 龍田に 春景  
もくして かつりぬれと やすく 春に 志を志す 雲れ  
冬に 空にぬれぬれと 谷に 小滝に 流るゝぬて 花  
白たふ 春にぬれぬれと 志故に 志のぬれ  
梢を 折り 折て 万里の 波濤に 身を志す 志今ハ  
折波 國難波の 邊に 志す 志のぬれ 志



うれたる熊谷是を二つねとせりし其日死す  
しとら意てあひいりけりおけりおせしうれを二  
つねをおりしといふは流せられたるおねと熊谷の  
發心のふたつねなり

元暦元年二月七日己未平家一谷を被流る日十三  
日横波國屋島に被つたる日同八日熊谷は  
二つねの身にせいてやうれしき中ありけり  
此言を流し流せしと思ふも私の抄ふかきせめて  
思ひの案りも免されたりりかいたるは小母を死  
に死骸をおししたる彼等いふ所をく難兵二人

水に二人おつてつり船に乗せ屋島の被つて送る日  
十三日雨刻に熊谷の使平家の船に追付たり  
中船中屋敷事いと中りし平家の船もいつくも  
と云れし源氏此方へ熊谷殿かの使と云れし  
平家の船中ありとなく熊谷の使と使の目をしてさく  
事と糾かりけりし熊谷の使の船もをりておねん  
中にせりたりたり新中納言此方へけりといふ  
そんといふ言交りけりた測も加程の小船に何事  
此方の爲に平内丸船にあらん新中納言といふ事  
と云神を尋らるる平家や角れたる家仲ハ本意地

にいかりし此系をりて志不牡丹絶たれむ、たれにふり  
 何てに果是ゆりて命ふ二人は、しんあ海にけし、舟に  
 あり、舟無き、後の舟たおし、向て重の板を尋ね  
 源氏の四方に、然谷殿が、修理大夫、有、正、帖、乃、い、と  
 かり、れ、新、中、納、言、ふ、り、て、是、は、松、の、帖、と、え、い、ゆ、り  
 と、て、修、理、大、使、を、あ、り、け、て、み、り、い、た  
 中子、敦、盛、は、舟、か、し、ん、死、骸、を、尋、ね、り、たり、り、り、打、心、な  
 り、を、り、か、し、て、と、や、う、と、恐、ら、り、け、る、事、を、れ、共  
 時、不、あ、り、何、い、り、て、お、ん、何、れ、の、道、カ、及、及、史、事、に、て  
 水、深、く、ふ、せ、れ、何、あ、山、丹、北、方、た、夢、の、残、り、る、あ、ら  
 志、て、い、ふ、ふ、し、た、を、か、れ、け、る、ふ、せ、め、と、(中、あ、り、)一、と、を  
 い、く、く、す、へ、ち、り、と、後、悔、せ、れ、け、る、事、を、衣、あ、る、は  
 船、の、い、け、る、事、を、船、上、下、み、の、船、を、め、り、け、り、然、谷、の  
 舟、れ、と、ひ、と、す、ら、何、く、多、い、か、と、社、思、は、れ、共、ふ、何、け  
 ら、く、是、を、と、送、り、た、る、お、れ、と、い、ふ、み、り、を、あ、り  
 一、修、理、大、使、有、然、谷、の、帖、を、い、け、て、み、り、ふ、に、其、帖、曰、  
 直、實、謹、言、不、慮、奉、此、君、亦、會、向、直、欲、決、勝、負、  
 刻、俄、忘、怨、敵、思、忽、拙、武、意、勇、利、加、守、護、奉、供、  
 奉、獻、霞、雲、之、大、勢、襲、来、成、落、花、過、時、直、實、  
 始、泰、會、平、家、難、射、源、氏、彼、多、勢、是、無、勢、也、

樊會還而縮煩養由藝爰直實適得  
生於弓馬家聿耀武勇於日域謀迫洛  
西怨歎靡旗三三寬三三歎得天下無双名群牧  
蛇成雷螳螂集如覆籠車愁引弓放矢  
釵築搆命於秦同方軍士名於流西海  
浪於世繫以非自他面目哉雖然奉仰  
彼君御素意嘉只御命於早給直實可  
奉訪御跡由頻被仰下同落泪乍抑不  
量給御頭畢怨哉悲哉此君与直實結  
怨緣於多生欲哉痛哉緣既深而奉成  
惡歎害非破逆緣者年乐切生死可成  
一蓮身還而於順緣哉然則日分刑君  
地行可奉訪御菩提直實申怡進善真  
偽定後開無其隱歎以此旨可然樣可  
有洩御披露也誠惶誠恐謹言

弄永三年二月八日

直實

進上伊賀平内左衛門尉殿

此書たりり方修理文政ふふに於る此の事  
西母北方一所にありて是れ死骸を中に  
おれ件の事心算を何れしと取りて夢りや

夢・多としてた、あふ介の事、おれたれ共然、谷の使  
此阿中りた久しく、泣ける、さうに思ひ、れて久れ、修  
理、またあ、ひ、み、を、お、し、て、出、て、重、く、今、月、七、日  
於、採、花、一、谷、と、所、敦、盛、死、骸、并、遺、物、不、能、送、給、畢  
此、事、出、於、花、洛、古、々、自、漂、西、海、浪、上、以、来、忽、互、運、命  
事、今、又、非、の、等、自、元、之、戰、場、上、者、何、不、思、返、哉、今  
者、定、離、者、憂、世、之、習、生、者、必、滅、者、穢、士、之、悲、尺、寸、以  
子、羅、唯、羅、等、者、於、悲、給、應、身、權、化、猶、以、如、初、何、况  
於、危、丈、哉、則、成、親、成、子、前、世、之、安、不、淺、去、七、日、步、出  
日、朝、其、面、影、未、離、身、燕、來、乃、無、聞、其、聲、双、翅、鴈  
飛、歸、不、返、音、信、必、定、被、計、由、雖、將、兼、未、聞、實、否  
間、風、便、聞、其、音、信、仰、天、外、地、奉、行、誓、佛、神、力、乃  
感、應、之、氣、七、日、中、得、見、彼、死、骸、是、併、与、佛、天、之、氣  
也、然、則、内、信、心、弥、銘、肝、外、感、淚、增、催、心、慈、社、但、生  
二、度、歸、來、又、是、相、同、蘓、活、抑、非、也、邊、帶、思、者、羊  
得、見、之、哉、一、門、風、塵、皆、以、捨、之、況、亦、慈、款、和、漢、而  
朝、古、今、未、聞、其、例、也、思、高、頂、弥、山、願、底、苦、志  
深、滄、溟、海、子、之、淺、歎、進、而、刎、過、去、幸、く、歎、退  
而、報、未、來、永、く、萬、端、雜、多、難、尽、筆、紙、併、察、之  
恐、謹、之

壽永三年二月八日

修理大夫經盛

熊谷次郎友

備中守師盛被討事

小太政大臣北山子師盛ハ小船に乗リて浦を渡りて  
たすけ船と云ふ船に上りて薩戸守御旨  
豊島九郎直治と云者宛竟の書大カクして  
上りて上小にちて何れと彼中々後の傳々せり  
二番と勢ふ心事と云いり薩戸守御旨内田豊島  
九郎と中者にて上りて何れと云々

内田豊島と云たりければ一に云ふと思はれける直治  
ありては亦此舟に乗じて世よしの事いければ内船と  
習ひくつと志すべしと待云中九郎はたし  
て此せよと云ふと云ふと云せてけり直治ハ大の男  
此書にちり高層が飛乗るハ船に乗るりて船  
をよみよと云けて乗るをまんとしてけり船よと云ふ也  
して一人りふと云ふハ船に乗るりて船をよみよと云けて  
重來浪不十部と云ハ船に乗るりて船をよみよと云けて  
それらを引揚取をる長刀持る男の作盛の  
首をよみよと云ふとしてよみて中りて何れと云々



のこ黒あるは川原中納言水子大夫業盛にて其  
おしありの望悲と云斗か一勢中納言大臣殿に中  
納言の武藏守にりおれは只頼賢よりこれ今  
古故弱くおれを免へ下人永長よりいれんま  
れ一人持る子のたやをたすんとして勢小五郎をみ  
かきむむれりさすさつるおれ人命はくおしれおれ  
とららのしく免れいふ人の思ふんとおれおれ  
はれ大臣殿よりいけつと武藏守よりいれん  
おれを能大將軍よりおれを御所のをわか  
おれよりおれとして水子の右衛門總のふしりをお

をれよりいふとらら同子より十七せうとて  
おれよりいふは是をみる人よりみおれい袖をぬら  
しるか永長より平内殿やおれは勢中納言を習也  
命たりより一氣にらりよりおれんとらまり原の  
ておれ者との名人の頭を牛をひいてけりて  
よりより千六百人とおれをたたり大將軍に越  
勢三位通盛茂より志度但馬守經正若狭守  
経俊武藏守知章小妻殿公達に備中守師盛  
川原中納言水子藏人大夫業盛修理大夫經盛此  
水子以上八人侍り越中守自盛俊筑後守永定村

かき起し大將軍に泣きかゝりて人執人と控申す  
し或は利銀を破りて地を倒或は流矢に中て矢  
命あり麻をちりせるおとくのみふあはれ山ふかく  
れ一筆幾千万の有らん其數を志すは主上女院  
内大臣平大納言以下人の北方船小のミカタ一カサ艘ヲこれを  
中後せむれけりいふ事事の覚えしけん心の中  
を志しおられて衣也翠帳に圍下事は禮法具  
ありてみれば舟に浪上一生の悲たるとん方り  
舟に物を思い及りて望悲也ハ入ハ船に中て  
子に故に例妻ハ船に何れハ夫ハ諸小伏友を控主を  
控てる片時ハ命をお志し兄を志すれ中身を忘れ  
てり志をしハ身をたもハ湖中の魚の何れもいた  
つゝふとハ龍頭の年の以筆糸をお控すハ仁をり  
主上を初美し纏て宗との人ハ船小のハ出るハ  
船政のあはれふれはうハたにむれハ伴路政ハをり  
望く船の何れ或ハ舟の雲を望んで後風を待芸  
望た波おきハハ船を返工何ハハ浦をつた  
いゆく船もを明小四國ハ渡る船ハ昭戸の沖を清後  
るハ一谷のお屋ふからりを浦ハ志まハハおふ  
けは若たういに死をを知りしにををひく事



給三々國勢此の志に事の按万葉抄初へをさる  
一日海也此度ハ所り事と思ひける一谷をり高化け  
くハカ<sup>尽</sup>いけそ、其思を化け、あふの度う、れぬらん  
此北よりみかさ田さうて黒漆のたりと成つ、念佛  
して後生をとつといふ事いとをし日本三位中将  
此北方大納言典侍殿けりとの内の乳母を化け  
とて大臣殿勢心一中まけける内事を屋の  
ハヤリける

小宰相身投給事

越前三位通盛命ハ大臣殿山娘とありける化給けれ  
共姫君いしおめかくあしけれありけり給事  
かろぬ故友ノ刑ア々憲方此山娘小宰相お友とて上  
西川院の中宮とりなる時宮中一此美人の化あへる  
ておしけれと容衆人ハ勝れて心操あはけあく  
あしけり化、閑人思ひけるいけり其中に越前  
三位左衛門佐とて、<sup>中</sup>若冠にてあしける時  
小宰相いしおめかくあしける朝夕ハ一齋に化給て  
んもぬつれを化人とてそのけりかると知給てのち  
由家の教れみつりける去用入給は、<sup>中</sup>て年月  
をさる給なる由文つとくける人ハすちかくあらん

け北三位三と能か此ありいたに(あ)と今(あ)の  
たりと世を此うたふと(あ)と書りあけて  
ん此を何なる程に何の時(あ)を此(あ)なり  
路つ(あ)ある人(あ)を何と(あ)て青(あ)さ(あ)ひ(あ)して(あ)  
乃(あ)名(あ)を(あ)車(あ)の(あ)ら(あ)へ(あ)け(あ)入(あ)す(あ)機(あ)て(あ)使(あ)ら(あ)れ(あ)け(あ)す(あ)と(あ)ふ  
矢(あ)ふ(あ)り(あ)小(あ)宰(あ)を(あ)友(あ)と(あ)れ(あ)何(あ)の(あ)人(あ)此(あ)つ(あ)て(あ)世(あ)や(あ)と(あ)て(あ)車  
此(あ)内(あ)にて(あ)志(あ)乃(あ)ひ(あ)く(あ)と(あ)れ(あ)る(あ)人(あ)と(あ)り(あ)由(あ)供(あ)の(あ)者(あ)共(あ)志(あ)と(あ)ん  
と(あ)り(あ)多(あ)れ(あ)大(あ)後(あ)に(あ)ま(あ)ん(あ)り(あ)ま(あ)ん(あ)り(あ)車(あ)に(あ)お(あ)う(あ)ん(あ)  
つ(あ)ら(あ)う(あ)く(あ)て(あ)思(あ)て(あ)つ(あ)ら(あ)い(あ)ぬ(あ)る(あ)程(あ)ふ(あ)由(あ)氣(あ)を(あ)く(あ)ら(あ)り  
け(あ)れ(あ)い(あ)ま(あ)あ(あ)つ(あ)に(あ)精(あ)り(あ)ら(あ)う(あ)て(あ)袴(あ)の(あ)ふ(あ)に(あ)も(あ)た(あ)  
て(あ)小(あ)車(あ)の(あ)あり(あ)あ(あ)いに(あ)る(あ)折(あ)し(あ)り(あ)由(あ)何(あ)程(あ)ひ(あ)の(あ)程(あ)あり(あ)れ  
と(あ)由(あ)前(あ)へ(あ)着(あ)り(あ)て(あ)由(あ)い(あ)何(あ)わ(あ)ひ(あ)と(あ)し(あ)て(あ)た(あ)ひ(あ)ひ(あ)ら  
程(あ)ふ(あ)乃(あ)み(あ)を(あ)お(あ)と(あ)り(あ)女(あ)院(あ)此(あ)由(あ)免(あ)に(あ)し(あ)り(あ)由  
ら(あ)ん(あ)と(あ)い(あ)く(あ)て(あ)由(あ)か(あ)と(あ)出(あ)路(あ)を(あ)引(あ)入(あ)す(あ)機(あ)を(あ)ひ(あ)て(あ)女(あ)房  
たち(あ)を(あ)免(あ)く(あ)由(あ)つ(あ)免(あ)て(あ)中(あ)さ(あ)り(あ)物(あ)を(あ)持(あ)り(あ)と(あ)免(あ)た(あ)れ  
人(あ)の(あ)出(あ)れ(あ)由(あ)ら(あ)ん(あ)せ(あ)よ(あ)と(あ)取(あ)心(あ)持(あ)た(あ)り(あ)此(あ)化(あ)の(あ)の  
文(あ)也(あ)女(あ)房(あ)に(あ)あ(あ)り(あ)し(あ)り(あ)志(あ)了(あ)ん(あ)と(あ)神(あ)仙(あ)よ(あ)う(あ)けて(あ)し  
た(あ)り(あ)れ(あ)小(あ)お(あ)殿(あ)白(あ)け(あ)し(あ)た(あ)か(あ)り(あ)て(あ)了(あ)ら(あ)勢(あ)多(あ)富(あ)用  
く(あ)程(あ)た(あ)に(あ)之(あ)へ(あ)ら(あ)れ(あ)け(あ)り(あ)女(あ)院(あ)此(あ)を(あ)ひ(あ)く(あ)て(あ)由(あ)免  
せ(あ)ら(あ)う(あ)に(あ)好(あ)爐(あ)煙(あ)を(あ)引(あ)く(あ)く(あ)ら(あ)ひ(あ)て(あ)弟(あ)の(あ)物(あ)と(あ)此

て(あ)小(あ)車(あ)の(あ)あり(あ)あ(あ)いに(あ)る(あ)折(あ)し(あ)り(あ)由(あ)何(あ)程(あ)ひ(あ)の(あ)程(あ)あり(あ)れ  
と(あ)由(あ)前(あ)へ(あ)着(あ)り(あ)て(あ)由(あ)い(あ)何(あ)わ(あ)ひ(あ)と(あ)し(あ)て(あ)た(あ)ひ(あ)ひ(あ)ら  
程(あ)ふ(あ)乃(あ)み(あ)を(あ)お(あ)と(あ)り(あ)女(あ)院(あ)此(あ)由(あ)免(あ)に(あ)し(あ)り(あ)由  
ら(あ)ん(あ)と(あ)い(あ)く(あ)て(あ)由(あ)か(あ)と(あ)出(あ)路(あ)を(あ)引(あ)入(あ)す(あ)機(あ)を(あ)ひ(あ)て(あ)女(あ)房  
たち(あ)を(あ)免(あ)く(あ)由(あ)つ(あ)免(あ)て(あ)中(あ)さ(あ)り(あ)物(あ)を(あ)持(あ)り(あ)と(あ)免(あ)た(あ)れ  
人(あ)の(あ)出(あ)れ(あ)由(あ)ら(あ)ん(あ)せ(あ)よ(あ)と(あ)取(あ)心(あ)持(あ)た(あ)り(あ)此(あ)化(あ)の(あ)の  
文(あ)也(あ)女(あ)房(あ)に(あ)あ(あ)り(あ)し(あ)り(あ)志(あ)了(あ)ん(あ)と(あ)神(あ)仙(あ)よ(あ)う(あ)けて(あ)し  
た(あ)り(あ)れ(あ)小(あ)お(あ)殿(あ)白(あ)け(あ)し(あ)た(あ)か(あ)り(あ)て(あ)了(あ)ら(あ)勢(あ)多(あ)富(あ)用  
く(あ)程(あ)た(あ)に(あ)之(あ)へ(あ)ら(あ)れ(あ)け(あ)り(あ)女(あ)院(あ)此(あ)を(あ)ひ(あ)く(あ)て(あ)由(あ)免  
せ(あ)ら(あ)う(あ)に(あ)好(あ)爐(あ)煙(あ)を(あ)引(あ)く(あ)く(あ)ら(あ)ひ(あ)て(あ)弟(あ)の(あ)物(あ)と(あ)此

一 向斜に少ふり一何ぞかき書たりけり

一 志の香谷はらばり浮世をまひ志りてはぬき袖を  
つれかき出さぬ中しくせうれしくかとうたり女院  
作たるはるは是れ何れぬをうらみたる名に社つれいふ  
思ひの屋中人より殿上はすしをりをもすます  
聞ゆり當時大政入道したる孫よりのふまのとりしゆふ  
わらひ思ふ屋きたる門値とやと凡にたれしうといふ  
うにら志るまのゆりふ人の心強たる身のゆりといふぬ  
るも此をふ乃世に成親たり青き鬼とかりて身を  
いづつふかしくいとりあけぬ事にはいり浮

此世中そのあをりと成て世に身ををぬれぬとふれ  
人をまゝとかりてあまうせん繫念無量却と  
うやいほみ原一小野小町とせける若の色形人ふ  
あそびて情けりやのせけれなる人夢人人を傷の  
ぬらふをけりゆれし其心しは心流す名をうた  
てまらにや人の思ひやうり候りてをては風をよせ  
く候りもかき一雨をりさぬてさかき一登とたぐ  
るも月望を深にやしくて目をあつる人のを志  
せもの志るさしはるうらみあせ遷の若菜  
をほりて命をつまけらに青鬼は身をふ放た

かりて此の世にほれ世より一かま事終るとよまて上り  
頂つて亦人小見つらん小い何なりいしく世いらん  
事をいつてうた、結ぶる處たな、おのいゝをいして  
人の心を憂ふめ力いなる返すをい我せんとして田硯  
引家めいして

谷原の中にかれてす終末楊女をては世を平しゝる  
から抱しそ世を結げれと小字おん力及結も人終ふ  
あむきぬひにり仙宮王妃七天地をのこてちれり  
やのていしはるやゆりしくいしたる心いそせいある  
事七かおたりげり世のたの末のそりしぬをあらけ

此て平しれ事ふとよま、何れおれは物思ひ終ふて雲  
此上宮中の抱ひめゆりく心結けるあや屋内しりり  
くあつて也かそておれ初めひと心出ありある程に  
おれにたういふ心すし、ゆきん思もれけ世と父  
母志すしれ人こもりもたれておとしやうしけりあ  
越そり三位の候結るるまを瀧はれ志りて依一本  
四節高経う時とそ七結中より出のれてうし  
れさ勢がゆれやそそお死をり自害をり仕てほ世の  
山供をりの中ひつてはつれとも我いゝるありらんす  
命を換あしりてして山に葉をみつしきまら

よしのひては仰ていと程ふほれなく泰りていと  
からく申され。此れ方是をたのひてうよれ終  
ぬときいふ事ありしひ、事りやとありひて二三  
日たたいふ出づる人を待出、地へておそくはるま  
ぢものれけれ去程ふ量かしく日数重りて四五日  
つりあり花字し、中のたはみりかそりもていふ  
思はまきりけちあのとこありける女席れた一人つた  
中りたりけふ十三の夜あやも人志つ中りては  
北方からく七日のけさあはれ此人の何れせんを  
世中たは、あはれ事と云つ、けてかみしをかう

志ういふわらふ云あらんとあはれさ、たしとてえつ  
うよのあふん、のちつて共思ひありしよよかまりし  
何りける事に我いふり成らんほい、極成るよ、ぬに  
てあはれんあら量とありしやらん、世の中、習ひ  
られ、ねし、<sup>お</sup>のら、い、か、る、人、よ、み、あ、ら、ん、と、ま、り、ん  
は、い、か、し、い、ひ、時、准、か、ら、ぬ、事、を、其、後、初、て  
知、り、得、たり、し、に、よ、あ、ら、ぬ、道、盛、あ、て、よ、三、十、に、あ、ら、ん  
す、ふ、子、と、云、お、あ、り、つ、る、始、り、子、を、み、ん、の、事、の  
始、り、し、よ、衣、お、ほ、く、い、富、子、と、て、り、何、れ、の、一、は  
る、つ、け、て、り、お、く、い、つ、と、る、舟、の、中、浪、た、く、く、た、あ、ま、し

み化ら身二川よりなり終らんとときあり、世人をん  
とぞら、今頃をんすの事の屋うにかけましく物ををの  
れうりけらら<sup>なま</sup>まをん軍を以つる此事を化を  
官部共思はり、ト十六の代つたををりて  
あり、に海世共ちまりかす、祇屋らん女ハ身二つと  
ありに十に九ハ死なれはくてもちあり、まをみん  
よりよりかろふぶん此世を志のむつて、てろの  
つてより志、後にするをせぬかろひなれ、やれたの事を  
ありの事、つるき、一、せりた、草の龍をん  
らむつ、けしは、世にあら、高<sup>out</sup>りあよ、せん  
やしの、まふ、一、せりた、あり、龍ふたつ、たよ、まれ  
い、此席は、まれ、み、り、も、思入て、志て、此山三洋の海  
と、ぬ、を、も、か、か、く、さ、こ、こ、此、み、思、め、の、せ、ま、ふ、む、り  
そ、や、り、り、を、か、け、入、事、い、と、お、一、古、く、お、ま、い、後、て  
か、ま、り、ら、ん、事、と、つ、み、や、て、み、け、れ、共、思、は、り、の、和、の  
事、も、あ、る、世、の、く、り、に、あ、り、た、ら、う、り、の、お、衣、本、を、い、い、  
か、ら、ん、僧、あ、り、を、導、て、わ、の、海、世、を、り、あ、ま、く、の、お、た、に  
を、も、ゆ、け、ら、ん、書、異、に、あ、る、を、を、お、都、一、と、あ、る、  
と、一、つ、あ、り、事、と、い、出、し、と、う、た、を、を、た、は、い、  
け、れ、と、い、は、い、か、く、が、外、の、事、あ、て、お、を、た、は、い、せ、  
ん

サリつらつ後書きとに終るるの中をれ実あり  
千原の底ふくまひ思入らんあらずんとむらう  
ち澄ましてやけりといふ思ふとひつひつ  
始てすそ甲の思ふとひつひつ有共上世身むらの事小  
てありんた薩平中及 但馬中及 若狭中及 伯耆中及  
北北方北東へけいといつれりおぼろふらん所れ共事  
出たるをいへてははさをさすといふいふ事終共  
中身をふけりふらんおとしつまた又困とさき  
思ふいとむすんはむすめ終れれと六道四生七同  
さいふり園いふあるさへかきめりあらん終るる  
現るん事のありといつれりといふ事二つ  
とある事終ておぼろふらんをけりてあま人の如く  
ふ共たりといふこと終れりあまたる事見え  
めをいふ事をいふと終るいふらんといふ山寺より  
そち終り終る終りに念仏中世終て 故殿は  
菩提をとりいひ番せ我の中身はほさをしめ  
終るらんには過たれは言ふにいてうらな終る  
終るらんはせりふらんこと 惟ふみつり  
いふある事終ていふ思ふたのにはいふ  
老たらあはれをいふおぼろふらんをいふ たり終て唯

一人つ甲をりつひもをたぐうためをみせんと思志  
めちらん土塔口焼けれ化とわたりをたゆむくさく  
その中れれ懐妊乃身とありてハ死する事を  
わす香と云ふれハ今様を波のうつにて明一巻  
勢ハ思ひぬれ浪風に合て心あつた身をい  
はつら小あすに免くもつる望う一巻とく此度心  
ひれむたりともおあふた者をたてみんね  
昔の人れみ悪くして思のねはずとあ共己身  
と記しより何し一巻ハ中くみだめ一雲の影ハ  
此夜も此夜さへ一巻ハ中くかの原氏大将のあ

不後月夜の内竹弘微殿の神よりハヤ身の上と  
お不ゆりぬいせうふた身れハ赤の心ありをる  
浦湯水りとりし船の橋あへて予ふ南中か忍  
やあつりし衣也叔念佛百屋ん斗ちて南  
世西市極示世界大慈大悲阿弥陀如来本願  
後給ん洋土に孕給てありてあれハ一巻  
七中一蓮れ縁とカ一巻ハ中くあむ跡の巻ハ  
入給ぬ一谷よりや〜ぬハ此れりより夜半の事  
あれハ人みれ寝入るりわちより一人み身をりて  
あふくは女席のあへ入給ぬとけけむけれハ乳母の



女席が終つての此人の志向は多岐にわたるといふ  
てかかるといふと母に其人ありや——何れや——と  
ければ其の故は其の後の塩漬をみるのみならず  
引塩を布く——して船をもとすの勢祐とありし  
り月小勝ありたの志強く浪も向うにわたりし  
と仰いて志を——とみつけをむと教多き  
とふのけん、船は底より——と終つておのれにけ  
りなきがたりあり——系志乃此系りに白髪を冠せ  
お終つては眼の中納言の字中納言律師忠懐と  
おは——いなき戒をきりた終つたなり三位この女席

此後三のこ——が其の終つておと——十九日をあつたけり  
なるかどと終つたなり終つたなりと思ふもよりこれと  
大臣の公算にておは——けたるなり板のむし  
の志すれ——と軍兵に乘る船小窓——と終つ  
て時々——おのれにけり三草山乃うりて終つて  
けせんりなり此女席此事也中納言の事あり  
切終つる嫡子越前三位又乙子の不斜悲しいあり  
大夫業盛なり——終つるなり事いふにあらざる  
此北方可なり終つるなりけしよあまや——と  
終つたなりけりの中は社もこれ——なりつるものと

おー斗ていとわした薩戸者但丁子の北古いお  
ハ一けれおふけた志の川みおのうぬおおハ一  
す一けれお首り今りまをさるる人をさる  
ささ又かとうつらなる此事也たあすちに身を  
おけたる事ハためしあふくともえいゆみの人  
聞へるみしをさるるとしし事ふく出れお忠  
と二君お少は負おハ西又にすみつあと言り誠  
あふ事此事権亮三位中將宗の五旅をみる  
お後におひとり向うさるるハあふくもあふれ  
共におあふくも此者共をさるる思はる我り引く

たり執りおる事おおのうやうとゆえての事に  
と思ひつつけおるの七回九部義經一公おお上  
よゆて弁刺に矢合して己刺に平家を攻る  
して宗徒乃人この顔同十回京一入と旬合たり  
けれ平家方の人と京にありとすりなる肝を  
すとハ一とにれくあふんと思ひ合けるおどお  
し其の中に権亮三位中將北古遍照寺の御お  
小倉山にありと大受寺と云寺に志のひて住  
あひけ系風やうりけけりやこの人船と舟あり  
まふん人をけし今大軍とたあゆりハ此今

ういれや老ぬしんとおのいつふぬ此頭共此中に  
とよもつれまゝとおふすふりあつた外の事  
か三位中将としふ人捕せられてはほり  
と剛りれとおあつた者共の意一たり志のむ  
ういれいふりして木の世をわひめんあふん  
と返くいつたりくのうといれの中に入ると  
あとおのいてやけとまうれてはほりあつた  
つふあつた思はてや志のむあつた若君姫君を  
く枕よやう給り頭共此中におはくあつた三  
位中将としふ本三位中将の事也と人あつた

中りれ共極誠し思給り若君の事  
てはあつた思はてや志のむあつた若君姫君を  
とおあつた思はてや志のむあつた若君姫君を  
をのれたり共給り思はてや志のむあつた若君姫君を  
けんあつた思はてや志のむあつた若君姫君を  
はあつた思はてや志のむあつた若君姫君を  
かあつた思はてや志のむあつた若君姫君を

平家頭獄門被掛事

十三日大夫判官仲頼以下檢非違使六条河原へ  
出向ひて平家此頭共を武士に預取て東國

院の大坂を北へ渡して左に楸川の木小かく越  
前三位通盛さしらの守忠度前但馬守經正  
世活し大守知章前備中守作盛門昭中納言  
乙子業盛修理大夫經盛七子息教盛此二人ハ  
末子信光ハ十子す大夫と中なる越中守司盛  
俊ハ政り渡されけり 鳳崩小跡を流す昔ハ  
怖る輩おかつた街に頭を渡さるハ中公表  
憐れ存すハハ愛樂に忽變りぬ是をみん  
人ハ深く心通るまお我頭共おのハ大坂を渡す  
後楸川にのり愈々ハ 軌頼義經等ハ此ハ

法皇思召てすらの勢強て藏人右衛門権亮定長  
御使として大政大臣左右大臣内大臣堀河大納言  
赤にのりしおのり五人公卿おのりすはるハ先朝  
七代天子此輩成て臣として久々ハ朝宗王仕  
ていた就中卿相大頭大坂を渡して楸川に抵  
る事ハ中ハ其例をいれん其上ハ軌頼ハ  
かり糸強ら不の智許家と中すはたりはハ渡さ  
る事ハたそそ五げのそハ父の社を信のんハ為君ハ  
位をありくありし依て命をおくハ合殿を  
侍て中務兼御免から月てのいさハつりて朝敵ハ

追討ありしと義経討文中に北に渡りて  
討伐なり

権亮三位中納言北村公氏此度一公を平家討りおかく  
こゝにありぬと見え給はれしつれも此人のまゝに  
りいなる案りふ京後五宗奥をめぐりおれは  
ゆい皇宮の昔くまの供をせりし人  
え知れしと笑ゆ中納言共の頭共の頭たる中に  
此人の頭ありて給はれしはまじけれ義経  
とそ又をえつしつれ我主の頭あり共事  
七五極目り出られしつれのまゝに浅出り  
人のちりけふよりお世にわたりて能く攻り給は  
り中けりし小書殿此を備中守友成と云ふ世  
給はつら其外はたれしと申は北村にありて  
此はともかしの人の上と思はれしち見給はれ  
京後守けるは雑色と思はれておこしにみ人お  
見つちけりしつれまらうそに中つら小書成  
云道ハ今度三草山をくのでをいけり一谷を  
にけれ新三位中納言二喜の船に寄て瀬波の地  
る船にり此備中守友成といふしを兄弟の四中  
ををちれてし給はると申の時よして権亮

...

三位中納言其時二年に以氣帯とて山形  
 津路乃地(岩手)にけり社兼りいと以中つ口  
 也と申けり此れ心強し人屋(三骨)の(か)り  
 とあれどつつけたる屋敷軍に何れ様の下帯か  
 れ大書(山形)の思(つ)あけ(井)の(法)り(り)も  
 病(は)け(り)小(け)る(山)形(を)せ(し)る(家)身(の)や(む)し  
 此(と)つ(や)事(は)一(度)り(い)ん(た)い(あ)あ(り)昔(共)未  
 だ(あ)れ(け)れ(終)ふ(二)五(三)社(あ)ま(ん)す(山)形(の)み(を)  
 大(の)一(か)守(出)給(と)た(の)み(い)る(に)ぬ(は)り(川)ら(い)る  
 には(あ)れ(み)れ(人)り(く)あ(れ)い(あ)れ(を)し(た)ら(ら)め(地)の

中山のむく(す)で(り)引(き)し(て)一(歳)に(何)つ(た)が(ひ)は  
 ら(さ)す(ま)事(り)あ(ら)ま(い)屋(敷)に(何)と(あ)く(山)を(屋)  
 だ(て)あ(り)に(抱)む(事)に(少)れ(て)孫(を)せ(み)あ(ら)か(し  
 せ(よ)と(あ)ら(り)給(つ)い(つ)あ(ら)病(と)あ(れ)ま(り)し  
 い(と)若(君)の(た)す(し)ら(社)とい(と)あ(し)ら(れ)い(つ)て(こ)ひ  
 の(屋)敷(い)と(あ)り(け)よ(人)の(え)ら(り)や(れ)化(て)あ(れ)  
 攻(り)あ(り)て(い)し(と)あ(ら)中(の)あ(ら)い(と)人(を)あ(つ)つ(と)  
 して(た)し(と)山(の)あ(ら)を(あ)ら(し)し(と)思(な)げ(れ)し(と)  
 た(れ)し(と)つ(つ)あ(ら)い(と)あ(ら)い(と)あ(ら)い(と)あ(ら)い(と)  
 又(か)み(し)を(せ)り(あ)ら(り)中(將)り(あ)ら(り)あ(ら)い(と)



Handwritten text in a cursive script, likely a title or header.

Main body of handwritten text in a cursive script, consisting of several lines of text.



